

Regional Theatre Projects

平成29年度
リージョナルシアター事業

事業報告書



一般財団法人 地域創造
Japan Foundation for
Regional Art-Activities

目次

はじめに	3
事業概要	4
派遣アーティストプロフィール	6
事業の流れ	7
リージョナルシアター事業の使い方	8
実施事業	
1 會津風雅堂（福島県会津若松市）	10
アーティストレポート 福田修志	15
2 神奈川県立青少年センター（神奈川県横浜市）	16
アーティストレポート 多田淳之介	21
3 公益財団法人としま未来文化財団（東京都豊島区）	22
アーティストレポート 田上 豊	27
4 三次市民ホールきりり（広島県三次市）	28
アーティストレポート 多田淳之介	32
5 はつかいち文化ホール（広島県廿日市市）	34
アーティストレポート 有門正太郎	39
6 高岡市民会館（富山県高岡市）	40
アーティストレポート 有門正太郎	45
7 袋井市メロープラザ（静岡県袋井市）	46
アーティストレポート 田上 豊	50
8 鶴舞市総合文化会館（京都府鶴舞市）	52
アーティストレポート ごまのはえ	56

はじめに

一般財団法人地域創造では、地域における創造的で文化的な表現活動のための環境づくりを目的として、地方公共団体等との緊密な連携のもと、全国の地方公共団体や関連の公益法人などが実施する文化・芸術活動に対し支援を行うほか、財団の自主事業として、研修交流事業、公立文化施設活性化推進、調査研究等の事業に取り組んでいます。

平成26年度からはじまった本事業は、演劇の表現者（演出家）を公共ホールに最大3回派遣し、演劇の手法を使ったワークショップを実施する事業です。各参加ホールのプログラムは、地域のニーズに合わせて自由に企画され、小学校へ出向き授業時間を使ってのアウトリーチ、高校の演劇部員への演劇のワークショップ、地元演劇人に向けてのファシリテーター養成講座など、多彩なプログラムとなりました。

この報告書は、「平成29年度リージョナルシアター事業」において実施した事業内容をまとめたものです。地域の公立文化施設の職員や地方公共団体の芸術文化担当者が、演劇の手法を活用したワークショップを企画される際や、公共ホールの担当者や地域の表現者の共同作業を行う際の参考としていただければ幸いです。

平成30年3月
一般財団法人 地域創造

事業概要

1. 趣旨

一般財団法人地域創造は、公共ホールの活性化と創造的で文化的な芸術活動のための環境づくりに寄与し、あわせて公共ホールスタッフ等の企画・制作能力の向上と創造性豊かな地域づくりに資することを目的として、演劇の表現者（演出家）を公共ホールに派遣し演劇の手法を使ったワークショップを実施します。

2. 対象団体

- ① 地方公共団体
- ② 地方自治法第244条の2第3項の規定に基づき指定管理者として指定を受け、公の施設の管理を行う法人その他の団体。
- ③ 地域における芸術文化活動の振興に資することを目的として設立された、公益財団法人等（②を除く。）のうち、地方公共団体が資本金、基本金その他これらに準ずるものを出資している法人で地域創造が特に認めるもの。

3. 事業内容

演劇の表現者（演出家、以下派遣アーティスト）を公共ホールに派遣し、演劇の手法を使ったワークショップを実施します。

(1) プログラムの実施時間：計840分のプログラムを実施します。

(2) 派遣回数：最大3回の派遣を行います（研修会を除く）。1回目は打合せや内部の研修、アウトリーチ先の下見に充てます。残り2回でプログラムを実施しますが、連続した日程にするなど派遣回数を計2回とする場合は、2回目が原則5泊6日になります。

実施時間の考え方

〈プログラムの実施時間〉

1回目の下見を除いた派遣において計840分のプログラムを実施することができます。時間の配分は、参加団体と地域創造、アーティストの三者で調整します。規定の時間数や日数を超えるプログラムの場合は、別途謝金や経費が発生し、参加団体の負担となります。

〈学校でのアウトリーチについて〉

学校（小・中・高校等）の授業枠でアウトリーチを実施する場合、1コマの時間は、小学校では45分×2時間（90分）、中学・高校等では50分×2時間（100分）を最小限とします。また、1コマの対象人数は1クラス約30人を目標にしています。

4. 支援措置

(1) 一般財団法人地域創造が負担する経費

①派遣アーティストにかかる経費

派遣アーティストにかかる研修会及び、下見、プログラム実施にかかる派遣3回分までの経費（謝金、交通費、宿泊費等）は地域創造が負担します。アウトリーチを実施する場合のアシスタント2名分の経費（謝金、交通費、宿泊費等）は地域創造が負担します。

(2) 参加団体が負担する経費

①研修会参加にかかる経費

ホール担当者の研修会の旅費（交通費、宿泊費等）は、参加団体の負担になります。

②プログラム実施にかかる経費

プログラムを実施する際の経費（会場使用料、機材使用料、消耗品等）は、参加団体の負担となります。

③その他

規定の時間や日数を超える分の別途謝金や旅費等の経費は、参加団体の負担となります。参加申込書及び実施計画書を考慮の上、決定します。なお、派遣アーティストの指定はできません。

5. プログラムについて

演出家が地域で演劇のワークショップを行うことで、各地域の課題に取り組むことが可能になります。演劇の手法を使った学校でのアウトリーチ、地元の演劇人や学校の先生、行政職員を対象にした研修会、地元の若い演劇人が派遣アーティストのアシスタントとしてワークショップに関わりステップアップを試みる、子どもたちを対象に演劇に触れる時間を持つなど、地域独自の様々なプログラムを自由に企画していただけます。

派遣アーティストプロフィール

派遣アーティストは派遣先の地域でワークショップを行う講師を務める他、公共ホールの企画するプログラムの内容について、ホール担当者と共に企画検討を行うコーディネーターの役割も兼ねます。



多田淳之介（演出家・俳優、東京デスロック主宰）

1976年生まれ、千葉県柏市出身。演出家、俳優。東京デスロック主宰。富士見市民文化会館キラリふじみ芸術監督。青年団演出部。俳優の身体、観客、時間を含めた現象をフォーカスした演出が特徴。古典から現代劇、パフォーマンス作品まで幅広く手がける。富士見市を中心に、他地域、教育機関でのアウトリーチ活動、創作活動も積極的に行い、韓国、フランスでの公演、共同製作など国内外問わず活動する。2010年4月に演劇部門では国内歴代最年少で公共文化施設の芸術監督に就任。2013年韓国で最も権威のある東亜演劇賞にて外国人として初の正賞受賞となる演出賞を受賞。演出作品『가모메 칼메기』は作品賞、舞台美術賞も受賞。おもな演出作品に『ロミオとジュリエット』『その人を知らず』『あなた自身のためのレッスン』『LOVE』『再／生』など。現在、四国学院大学非常勤講師。



田上 豊（劇作家・演出家、田上パル主宰）

1983年熊本県生まれ。桜美林大学文学部総合文化学科卒業。2006年、劇団「田上パル」を結成。方言を多用し、疾風怒濤のテンポと、遊び心満載の演出は「体育会系演劇」とも評される。大学在学中にワークショップデザインを研究し、現在、教育現場を中心に、創作型、体験型のワークショップを全国各地で実施している。演劇部の嘱託顧問や、総合高校での表現科目「演劇」の授業を受け持つなど、教育現場での経験も持つ。高校生、大学生とのクリエーション、リーディング、市民劇団への書き下ろしなど、劇団外での創作活動も展開。現在、富士見市民文化会館キラリふじみアソシエイトアーティスト、青年団演出部所属。



有門正太郎（演出家・俳優、有門正太郎プレゼンツ代表）

1975年生まれ北九州市出身。倉本聰主宰「富良野塾」、泊篤志代表「飛ぶ劇場」を経て、2005年「有門正太郎プレゼンツ」を始動。「笑顔になれば何でも出来る」を合い言葉に作、演出も勤め全国でワークショップやアウトリーチ活動も行っている。俳優では様々な全国ツアー公演等に参加。高校演劇専科での講師経験を活かし、北九州芸術劇場「日韓合同キャンプ〜チャレンジ！えんげき〜」の総合演出等も務める。役者として主な出演作品、富良野塾公演『今日、悲別で』『走る』（作・演出：倉本聰）、北九州芸術劇場プロデュース『錦鯉』（作・演出：土田英生）『江戸の青空』（作：千葉雅子、演出：G2）、時空の旅『シラノ・ド・ベルジュラック』（演出：永山智行）など。



福田修志（劇作家・演出家、F's Company 代表）

1975年生まれ、長崎市出身。長崎大学教育学部卒。1997年にF's Company（フーズ・カンパニー）を旗揚げし、以後、作・演出を務める。現代社会の中に潜む人間の弱さを寓話化して描く作風が特徴。長崎市主催の市民参加型舞台にも深く関わり、九州圏内の学校や地域での演劇ワークショップの講師や外部脚本の執筆、地元TVやラジオのCM出演なども行っている。代表作『マチクイの詩』（第15回日本劇作家協会新人戯曲賞最終選考作品）、2009年度～長崎市自主文化事業『演劇による表現力育成事業』の講師、2011年度文化庁「次代を担う子どもの文化芸術体験事業（派遣事業）」の講師。



ごまのはえ（劇作家・演出家・俳優、ニットキャップシアター代表）

1977年大阪府生まれ。劇作家、演出家、俳優。佛教大学在学中より演劇をはじめ。1999年自身が劇団代表となって「ニットキャップシアター」を設立。以来、京都を創作の拠点に日本各都市で公演をおこなっている。作品には民族楽器の演奏や独自の身体表現が使われ、時に「わかりづらい」といわれる時もあるが元気に活動をつづけている。また近年は「古事記」にあるエピソードをもとに物語をつくっている。2004年『愛のテール』にてOMS戯曲賞大賞受賞。2005年『ヒラカタノート』にてOMS戯曲賞特別賞受賞。特技はムックリ。2016年度より京都造形芸術大学講師。

〈アドバイザー〉内藤裕敬（劇作家・演出家、南河内万歳一座座長）、岩崎正裕（劇作家・演出家、劇団太陽族主宰）

事業の流れ

1 全体研修会

平成29年4月24日(月)～25日(火)

2 事業内容の調整・下見の調整

・派遣先への説明、日程調整

3 合意書の締結 (三者)

・ワークショップ実施日程、内容
・経費負担の取り決め等

4 1回目派遣 (原則1泊2日)

派遣アーティストと地域創造担当者が現地を訪問し、打ち合わせと会場下見、インリーチ等を行う。

5 事業内容の再調整・派遣先との調整

6 2回目派遣 (原則3泊4日／3回目派遣と合わせて5泊6日も可)

プログラム実施

(派遣アーティスト×1名、アシスタント×2名、地域創造1～2名)

① 移動・打ち合わせ、② 実施1日目、③ 実施2日目、④ 移動

7 3回目派遣 (原則3泊4日)

プログラム実施

(派遣アーティスト×1名、アシスタント×2名、地域創造1～2名)

① 移動・打ち合わせ、② 実施1日目、③ 実施2日目、④ フィードバック・移動

8 事業報告書提出 (事業終了後1ヶ月後)

リージョナルシアター事業の使い方

— 平成29年度参加団体のプログラムから

リージョナルシアター事業は、パッケージ化されたプログラムを実施するものではありません。参加団体担当者とアーティスト、地域創造の三者が対話をしながら、地域やホールの課題や展望を整理してプログラムを作っていきます。平成29年度の特徴的なプログラムをご紹介します。

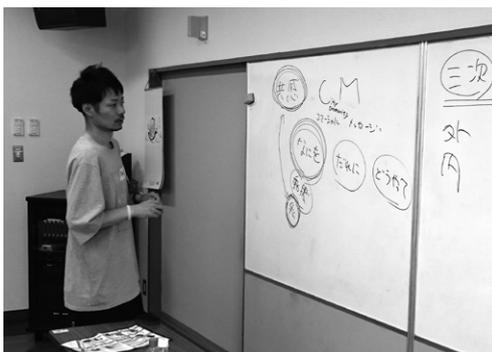
ホールとの日常的な関係をつくる～街を歩いてカルタを作ろう！（会津若松市）

「夏休みの自由研究にもってこい！」なプログラムで定員を超える申し込みがありました。公演を中心に事業を実施してきた公共ホールが、日常的に子どもたちと関わっていくためのきっかけ作りとなりました。



ホールを支える市民をつなぐ～街のCMを作ろう！（三次市）

街の魅力を共に発見するための手段として演劇的な手法を使った「CM作り」というプログラムは、芸術文化やホールと縁遠かった市民の参加を促すことになりました。ホールと市民をつなぐ接点を増やしていくことを目指したプログラムです。



アウトリーチの効果を共有する～教職員を対象としたワークショップ（三次市）

小学校へのアウトリーチ事業（授業内で演劇ワークショップを実施する）の理解を求めするために、教職員有志を対象に子どもたちと同じワークショップを実施。アーティストがワークショップの意図等を説明することによって、教職員の演劇ワークショップへの理解を深めました。



新たな事業へと結実～フリースクールへのアウトリーチ（神奈川県）

青少年育成を教育、自立支援の観点で展開する施設が、これまで協働する機会の少なかった部署の連携のために本事業を活用しました。その成果によって、演劇を手段として県内の若者自立支援のNPO等を支えていく新たな事業へと展開していく予定です。



市民参加事業のキックオフ～3か年計画の1年目として活用（舞鶴市）

街の歴史や記憶をテーマにした演劇創作プロジェクトの1年目として本事業を活用。地域のリサーチや、市民や高校生を対象にした写真から物語を作っていくワークショップを通して、協力してくれる市民のネットワーク構築を目指しました。



CASE 1 會津風雅堂（福島県会津若松市）

実施データ

実施団体	公益財団法人会津若松文化振興財団		
実施ホール	會津風雅堂		
担当者	山宮 勇		
派遣期間	1回目派遣 平成29年5月16日(火)～5月18日(木)		
	2回目派遣 平成29年6月5日(月)～6月8日(木)		
	3回目派遣 平成29年7月20日(木)～7月23日(日)		
アーティスト等	アーティスト:福田修志 アシスタント:松本恵、田中俊亮		
1回目派遣内容:	5月16日	ワークショップ会場下見・打合せ(ザペリオ学園小学校)、市内視察	
	5月17日	ワークショップ会場下見・打合せ(神指小学校)、市内視察、企画内容の打合せ	
	5月18日	新聞社にWS告知掲載依頼、企画内容の打合せ	
2回目派遣内容:	6月5日	意見交換会	
	6月6日	9:30～11:20	神指小学校5年生対象ワークショップ(参加者:17名)
		13:55～15:30	ザペリオ学園小学校6年生対象ワークショップ(参加者:35名)
		18:30～20:30	一般対象ワークショップ(参加者:14名)
3回目派遣内容:	7月20日	当財団主催演劇事業の下見	
	7月21日	18:30～20:30	一般対象ワークショップ(参加者:17名)
	7月22日	10:00～14:00	まちカルタワークショップ(参加者:16名)
		18:30～20:30	一般対象ワークショップ(参加者:16名)
	7月23日	10:30～11:45	フィードバック

スケジュール

	1回目派遣			2回目派遣				3回目派遣			
	5/16	5/17	5/18	6/5	6/6	6/7	6/8	7/20	7/21	7/22	7/23
9:00											
10:00					小学校①						
11:00			新聞社		9:30～11:20						フィードバック
12:00			市内視察							まちカルタ	
13:00										10:00～14:00	
14:00		会場下見	打合せ								
15:00		市内視察	新聞社		小学校②	まちカルタ			まちカルタ		
16:00					13:55～15:30	下見			下見		
17:00	会場下見	まちカルタ				打合せ			打合せ		
18:00		下見									
19:00		打合せ									
20:00				意見交換会	一般①	一般②		当財団演劇事業の見学	一般③	一般④	
21:00					18:30～20:30	18:30～20:30			18:30～20:30	18:30～20:30	

担当者の報告・評価

■ この事業への参加動機

住民参加型演劇事業の充実を図るため

当財団では3年に1度、地域の人物や出来事をテーマにした住民参加型演劇公演「てづくり舞台」を実施している。平成30年には第8回目の公演を開催予定で、今秋から事業がスタートする。20年以上に渡り事業を実施するなかで課題がいくつか出てきており、その解決に取り組んでいる。リージョナルシアター事業に参加する事で、経験豊富な専門家からアドバイスをいただくと共に、課題解決のアプローチをしたいと考えた。

小学生・高校生を対象としたワークショップ

平成18年度に実施した「ダン活」以降、小学校に出向いてコンテンポラリーダンスを体験していただくアウトリーチワークショップを複数回実施しているが、演劇のアウトリーチは経験が無かった。今回の事業を通して演劇アウトリーチの効果・反響を体感したいと考えた。

また、会津地域は高校演劇が盛んで、近年では東北大会に進出する事も多くなっている。高校生を対象としたワークショップを実施した事も無いため、助言をいただきながら実施したいと考えた。今まであまり演劇に力を入れた事業を実施したことがなく、絶好の機会であると捉えていた。

■ 企画・実施において苦労した点

会館と接点がなかった人との接点づくり

これまでの「てづくり舞台」は毎回10名以上の新規参加があるものの、参加者の大半はリピーターである。リピーターが多いのは事業の満足度が高いことと前向きに捉える事もできるが、事業担当としてはもう少し新規参加を増やしたいところである。アーティストと打合せをする中で「演劇」という言葉を使わずにワークショップ参加者を募り、演劇の手法を用いたワークショップを体験していただく事で演劇の楽しさを体感していただく事にした。これまで同様、市内全戸に情報紙を配付し、当財団ウェブサイトに参加者募集の記事を出し、公民館等の人が集まる施設にチラシを配置してもらったが、それだけでは効果が少なく、参加者集めに苦労した。また、参加料を無料としたため、当日キャンセルが多く、当初の見込みより参加人数が少なくなってしまう残念だった。

■ プログラムを実施した成果

リージョナルシアター事業だから実施できた挑戦的な演劇ワークショップ

当財団では住民参加型演劇公演「てづくり舞台」の充実を図るため、毎年演劇ワークショップを実施している。様々なアーティストを招き、回数を重ねる中で、私は「演劇ワークショップ＝演技の引き出しを多くすること」と思い込んでいた。アーティストごとに演技に対するアプローチが異なり、様々な角度で演技について学ぶ事で、表現の幅をひろげるものだと思っていたのだ。なので、事業申込時点では「小学

生」「高校演劇部員」「演劇経験者」を対象としたプログラムの実施を希望した。

事業実施にあたり、地域創造スタッフ・アーティストと打合せを重ねるたびに「なぜこのプログラムを実施したいのか」「どのような展望があって、このプログラムを実施したいのか」沢山の質問をいただいた。1つ1つ回答する中で、地域の課題が少しずつ鮮明になってきて、最終的には多彩なプログラムを実施する事ができた。特に印象的だったのが「まちカルタ」の活動だ。まちを歩いて写真を撮り、それをカルタにする活動のどの部分が演劇的なのか、全体研修を受けるまでは分からなかったし、実際に体験するまでは正直不安もあった。しかし、体験してみれば魅力に溢れた活動だった。同じ道を歩いても人によって見え方が違うし、同じ物でも着眼点が違う。申込人数も31人と最多であった（真夏の炎天下での活動のため、当日キャンセルが多数あり、参加者は16人）。経験豊富なアーティスト・地域創造スタッフの助言・サポートがあったからこそ実現できたプログラムであった。この事業を通して、演劇ワークショップの可能性が大きく広がったように感じた。

■ 今後の展望

アウトリーチ・まちカルタを継続実施

大学入試制度の変更に伴い、各校ともアクティブラーニングに注目し始めている現状で、演劇アウトリーチは児童・先生双方に有意義であることを感じた。今後は「小学校へのアウトリーチ」「まちカルタ」を毎年実施したいと考えている。また、地元劇団員をアシスタントに活用することで、地元劇団員の育成を図っていきたいと考えている。

プログラム詳細

神指小学校5年生対象ワークショップ

6月6日(火)9:30～11:20(休憩20分含む)

参加者17名

「今日は何をやると聞いていますか？」講師の問いかけに「劇をやる」と答えた児童たちはいくぶん緊張気味だった。そんな児童の目の前で「宝探し」をテーマにした芝居が始まると、次第に児童の表情が明るくなってきた。身体と頭のストレッチが済んだ頃には児童との距離がぐっと縮まり、休憩時間には講師の周りに沢山の児童が集まっていた。後半は3グループに分かれて「物語を生み出す」ワーク。名前・性格カードによって物語の登場人物になった児童が、3枚の写真からイメージを膨らませて物語を創作していく。頭と頭がくっつくほど密着して創作に没頭する児童たち。最後はそれぞれの物語を発表した。発表する方も聞く方もみんな笑顔だったのが印象的だった。終業のベルがなった後、講師の前には握手を求める列ができていた。



会津若松ザベリオ学園小学校

6年生ワークショップ

6月6日(火)13:55～15:30(休憩5分含む)

参加者35名



2クラス合同のワークショップを神指小学校と同じ内容で実施。みんなで1つの円になり、見えないボールを手渡しするワークでは、ルールに縛られない自由な発想で表現する児童が出てくるなど、活動を最大限楽しんでいるように見受けられた。後半の物語創作は、1グループ10人以上になってしまったため、児童にも講師にも負担を掛けてしまう状況であったが、経験豊富な講師の気配り目配りにより、皆で協力して物語を生み出すことができていた。発表の場面では、セリフだけではなく動きまでつけて表現している児童が複数いた。

表現を考えよう～コミュニケーション～

6月6日(火)18:30～20:30 一般公募14名

演劇という言葉を使わずに参加者を募集し、ワークショップを体験していただく事で、新たな演劇ファンをつくりだす事を目的とした事業。身体と頭をほぐす準備運動の後で、声についてのワークを行った。相手の心に響く声は、身体を響かせて発する声である事を学び、早速試してみる。身体のどこまで響かせる事ができるか、身体の一部だけを響かせる事ができるか意識しながら声を出す。声と心の特性についてレクチャーを受けた後で、次は身体表現についてのワーク。言葉を使わずに身体表現だけで『しりとりに』を行う。相手が何を表現しているのか受け取る方も、相手に物事を伝える方も、どちらも真剣に取り組む。相手に正しく伝わった時、相手の表現を正しく受け取れた時の素敵な笑顔が印象的だった。



表現を考えよう～物語を生み出す～

6月7日(水)18:30～20:30 参加者10名

まずは会場内を自由に歩きながら、講師から出されたお題に対して同じ答えのグループを作るワーク。『会津の美味しい食べ物は』『ソースカツ丼』『馬刺し』『こづゆ』それぞれ声を出しながらグループを作る。参加者のキャラクターが次第に鮮明になってから、今度は2人1組になって他己紹介。数分の交流時間の後で、パートナーをみんなに紹介

する。『好きな音楽は？』『ドライブはどこまで行くの？』などの質問にも答えていく。後半は小学校でも実施した物語を生み出すワーク。初対面が多かった事もあり、学校とは違った雰囲気だったが、自己主張したり、相手の主張を尊重したりしながら協力して素敵な物語を作成。また、ワークショップ終了後の交流会にも沢山の方が参加し、楽しい時間を過ごしました。



もっと演じたいくなる演劇ワークショップ

7月21日（金）18：30～20：30 一般公募 17名
7月22日（土）18：30～20：30 一般公募 16名

演劇経験者を対象としたワークショップ。市の広報誌による告知のほか、市内劇団や高校演劇部にも案内を送付し公募した。「身体が話していること」「言葉が持つチカラ」について考え、発信・受信双方の感度を高めるためのワークを実施。1日目は身体表現をテーマにしたワーク。言葉を使わずに2人1組で何かを作るロボットを表現するワークや、待ち合わせをしている演技をして、誰を待っているのか鑑賞者に当ててもらおうワーク等を実施。2日目は言葉・音をテーマにしたワーク。単純な絵を言葉だけで伝えて、全く同じ絵を書いてもらうワークや、音楽を聞いて発想した物語を言葉を使わずに演技し、どのような物語に見えたか答えてもらうワークを実施。終了後の交流会に沢山の方が参加し、早朝まで演劇談義に花を咲かせました。



まちを歩いてたんけん発見！

まちカルタをつくろう

7月22日（土）10：00～14：00 参加者10名

演出家と共にまちを歩き、見つけたものを写真に撮りカルタにする活動。「夏休みの自由研究にもピッタリ」という告知も効いて、参加者の半数は小学生、親子での参加が中心。会館でアイスブレイク・事業内容の説明をしてから、会館周辺の住宅地を舞台にカルタのネタを探す探検へ。天気は快晴、真夏の炎天下という悪条件での活動だったが、子どもたちの笑顔に大人の顔もほころびやかな雰囲気探検終了。撮影した写真を3枚厳選しプリント、色ペンを使い分けながらオリジナルのカルタ作成へ。同じ場所を通ったはずなのに見えていなかったものや、同じ物なのに全く別な発想でカルタを作っていたりと、この活動の奥深さを感じた。それぞれの活動は当財団HPに事業レビューを掲載。「会津若松文化振興財団」→「最新情報」→「事業レビュー」



フィードバックの論点

〈参加者〉

館長、事務局長、担当者、アーティスト、アシスタント、地域創造

〈論点〉

- ・館長、担当者による事業成果についての意見。
- ・今回の事業プログラムを目的別に分類。ホール事業としてどのように定着化させていくかを検討。
- ・収益性のない事業を継続していくために地域創造の助成プログラムを紹介。

種を蒔き、畑を耕す

仕掛けることへの転換点

会津若松市という歴史ある街に佇む會津風雅堂。鶴ヶ城の足下に位置するその劇場は、歴史溢れる街に溶け込んだ姿で、12万人ほどの市民の文化を支えています。様々な芸術公演がこの劇場で行われ、市民にとっては街の文化拠点とも言うべき存在。ですが、芸術以外に劇場との接点を見出すことが出来ていないというのが、これまでの課題でした。観客として、または表現者（表現団体）としての関わりしかない劇場は、芸術作品を楽しむ『場所』としての役割でしかなく、劇場としては『待ち』の状態。その現状を打破すべく、「市民に対し、観客や表現者以外の接点を作っていく。」という新しい『攻め』のスタンスに取り組んだことは、勇気があることであり、大切な一歩だと思えます。

地域の接着剤としての演劇

今回実施した小学校でのアウトリーチ事業では、子供たちに『表現することの楽しさ』に触れてもらいながら、お互いに意見を出し合うことで『コミュニケーションの難しさや楽しさ』を感じてもらい、親子参加の『まちカルタをつくろう』というワークショップでは、まち歩きを楽しみながら、様々な人の『街を見る目』に触れることで、自己と他者との目線の違いや面白さを感じてもらいました。特に『まちカルタ』では、これまで劇場が実施することが無かった親子参加型の企画ということもあり、劇場側としては実施にあたっての不安もあったと思いますが、予想以上に多くの応募が来たという結果から考えると、そういった需要があったとも考えられますし、何より前述の「市民に対し、観客や表現者以外の接点を作っていく。」という目的に沿った、劇場と地域住民との接着剂的な事業になったと思います。

演劇は、こういった『接着剂的な役割』に強いと

いう特性を持っていて、その特性は『演劇』という名前を表に出さなくても発揮されます。『人と人』『人と場所』を繋ぐために演劇を使う。そのために『演劇』という看板が邪魔なのであれば、いつでも外せば良いと思いますし、必要ならば付けければ良い。紋切り型の考え方をいかに崩して柔軟に考えられるか。その柔軟な思考が今後のホール運営の鍵を握っていると言っても過言ではありません。公共のホールが、いかにして地域に還元するかという命題の解決策は、一つではないのですから。

街の文化を生み出す仲間

会津若松市の演劇状況は活発で、高校演劇もさることながら、社会人劇団も活発です。その大きな財産を生かすも殺すも劇場次第という状況下で、これからをどうするか？というのは大きな命題です。次のステップへ劇団を後押しするのか？それぞれの自主性に任せるのか？せっかくある地域資源なのですから、何らかの形で活用し、お互いに依存することなく関われば、劇場と表現者とは『街の文化を生み出す仲間』として、素敵な関係になると思うのです。

CASE 2 神奈川県立青少年センター（神奈川県横浜市）

実施データ

実施団体	神奈川県
実施ホール	神奈川県立青少年センター
担当者	神奈川県立青少年センター舞台芸術課 藤岡審也
派遣期間	1回目派遣 平成29年6月1日(木) 2回目派遣 平成29年8月10日(木)～8月12日(土) 3回目派遣 平成29年12月7日(木)～12月10日(日)
アーティスト等	アーティスト:多田淳之介 アシスタント:舘そらみ・橋本清(2回目)、桐子カヲル、岩澤哲野(3回目)
1回目派遣内容:	6月 1日 ①8月のワークショップ派遣先「寄宿生活塾 はじめ塾」(小田原市)の見学、はじめ塾代表者の和田さんとの打合せ ②実施プログラムの打合せ(多田、地域創造、県立青少年センター舞台芸術課・青少年サポート課)
2回目派遣内容:	8月10日 前日打合せ(多田、地域創造、県立青少年センター舞台芸術課) 8月11,12日 2日連続のプログラムで演劇ワークショップ実施(会場:はじめ塾の夏季合宿所である山北町の「市間寮」、小学校低学年～高校生までの子ども39名が参加)
3回目派遣内容:	12月7日 12月9日からのワークショップ準備(アーティスト、アシスタント、地域創造、県立青少年センター舞台芸術課、綾瀬市青少年課) 12月8日 職員向けワークショップ実施(会場:県立青少年センター研修室1、参加者:職員15名) 12月9日 親子向けの「新聞ドームハウスを作ってみよう」ワークショップ(会場:綾瀬市役所315会議室、参加者:小学生以上の子どもと保護者27名) 12月10日 ①親子向けの「新聞ドームハウスを作ってみよう」ワークショップ(会場:県立青少年センター多目的プラザ、参加者:小学生以上の子どもと保護者27名) ②フィードバック

スケジュール

	1回目派遣	2回目派遣			3回目派遣			
	6/1	8/10	8/11	8/12	12/7	12/8	12/9	12/10
9:00								
10:00								
11:00	「はじめ塾」 見学・打合せ (小田原市)			「はじめ塾」 WS2 日目 (山北町) 9:00～ 16:00				
12:00								
13:00	実施プログラム 打合せ		「はじめ塾」 WS1 日目 (山北町) 11:00～ 17:00	親子向け WS 事前準備				
14:00								
15:00		実施プログラム 打合せ			青少年センター 職員向け WS 14:00～ 16:00	親子向け WS (綾瀬市) 14:00～ 16:00	親子向け WS (綾瀬市) 14:30～ 16:30	
16:00								
17:00							フィードバック	
18:00		打合せ						
19:00								
20:00								
21:00								

担当者の報告・評価

■ この事業への参加動機

当館は神奈川県における青少年育成の拠点として1962年に開館した県立施設です。通常の文化施設とは異なり、4つの機能[※]が一体となって、青少年の豊かな人間性や社会性、創造性、コミュニケーション能力をはぐくむための取り組みを行っています。

当初の申請内容は、舞台芸術課で半世紀以上行ってきた学校演劇や地元演劇人への支援の取組みのアップデートと、職員のスキルアップを目的とする従来からの「舞台芸術課」の取組み内で完結する内容でした。しかしながら、当館が持つ文化施設とは異なる設置目的や施設全体での取組みに着目した助言が多田さんや地域創造担当者の方からあり、実施内容を大幅に変更するに至ります。具体的には、舞台芸術課とは別の事業課（青少年サポート課）で持つ、引きこもり等の心の課題を持つ青少年を支援するNPO等とのネットワークを活用し、そうした現場にアーティストを派遣し、演劇の持つコミュニケーション能力や他者の個性を尊重する姿勢等を育むためのワークショップを行うというものです。

舞台芸術課では、これまで社会包摂的な視点での取組みはありませんでしたが、今後の文化芸術に求められる役割としてアートを介した社会の課題解決が意識される状況であること、また、当館としても「4つの機能」が連携した取組みを強く求められていた状況など、文化政策的にも施設運営上においても少なからず課題があったことから、事業内容の変更を助言いただいた時は、正直目から鱗が落ちる思いをしました。通常、事業内容の変更は時として後ろ向きな理由によることが多いと思いますが、今回の場合、より前向きな意識が醸成され、それが組織としても共有され、施設の今後のあり方のヒントにも繋がりました。このことは、リージョナルシアターという柔軟な器以外では生まれなかったと思いますので、多田さんと地域創造のご担当者の方には大変感謝しております。

※ 神奈川県立青少年センターの「4つの機能」：舞台芸術活動の支援（舞台芸術課）、ひきこもり・不登校や非行等への対応（青少年サポート課）、体験学習を推進する人材の育成（指導者育成課）、科学体験活動の促進支援（科学支援課）

■ 企画・実施において苦労した点

想定されていたことですが、学校演劇部や若手演劇人向けといった「演劇のためのワークショップ」とは異なり、「演劇の手法を活かしたワークショップ」についての実績が乏しい中、その取組みの意義を外部に説明すること（受入先のNPO等を探すこと）が難しかったです。

■ プログラムを実施した成果

2つのアウトリーチのプログラムでは、受入先のNPO等や参加者から高い満足度と評価をいただくことができました。また、当館の舞台芸術課以外も含めた職員向けのワークショップを併せて実施したことで、職員自身が「演劇の手法を活かしたワークショップ」を体感し、演劇が持つ特性や社会の様々な場面への応用力を施設全体で共有することができました。

何よりも、今回のリージョナルシアターの機会を活用してプログラムを一度実施できたことで、事業の意義やノウハウを少なからず得ることができたことから、来年度以降も県の施策として継続実施するための予算獲得が可能となり、当初想定した以上の成果となりました。

■ 今後の展望

今後の課題とも言えますが、「演劇の手法を活かしたワークショップ」の意義や効果というものを外部に説明するための実績やノウハウを蓄積すること、また、県の取組みとしてそれを支える人材も含めて広げていくことが求められます。

来年度から、今回のプログラムを踏まえた事業を、県内の複数箇所で地元のNPO等の協力を得ながら実施していきますが、前述の課題に向き合いながら、今回のリージョナルシアターをきっかけにして始まった「舞台芸術の持つ力を社会の課題解決に活かす取組み」を、当館の「4つの機能」がお互い連携することにより、神奈川県立青少年センターならではの青少年支援として、今後発展させていきたいと思えます。

プログラム詳細



「寄宿生活塾 はじめ塾」での 演劇ワークショップ

8月11日(金)11:00～17:00

8月12日(土)9:00～16:00 参加者:39名

青少年を対象にした寄宿型フリースクール「寄宿生活塾 はじめ塾」の生徒を対象とした演劇ワークショップを2日間連続のプログラムで行いました。丹沢山麓（山北町）に位置するはじめ塾の寮（市間寮）には、全国から数多くの子どもたちが参加して、季節ごとに多彩な合宿が開かれています。今回のワークショップはその合宿中のプログラムの一環として実施し、はじめ塾に普段から寄宿している10名程度の生徒とはじめ塾のメールマガジン登録会員の30名程度が参加して行われました。

参加者の年齢が小学生低学年～高校生と幅があることから、多田さんをはじめアーティストの方々にとってはプログラムの構成に苦労されたと思いますが、前半はゲーム的なワークを中心に、参加者の自発的な参加を自然に促すようなプログラムが行われ、2日目の午後からアシスタントの2名の演出家も加わって、3グループに分かれて短編作品を創作し、発表しました。

事前に脚本を用意して枠にはめていくのではなく、それぞれのグループの子ども達がお互いのアイデアを持ち寄り、それぞれが役割分担を子ども達が決めていく中で、お互いのコミュニケーションも活発になり、最初は消極的に感じられた何人かの子どもも、徐々に積極的になっていく様子が印象的でした。また、創作の中で、全員が自分の持ち場を果たしていくことで、達成感が生まれていく様子も伺えました。

なお、はじめ塾の方針で、普段から引きこもりや不登校の子どもと一般の子どもが交じり合って生活・活動している環境であり、今回参加した不登校児は参加者の1割程度ということでしたが、どの子どもだったかは最後まで分からないほど、全員が活発に参加していたことに驚かされました。はじめ塾 和田塾長からは、「単に、子どもたちに何かをやらせて自信をつけさせるのは、他のワークショップ

等でもやっていたが、お互いの個性の違いを認めさせ、他者への尊重や接し方に気付かせるようなやり方は初めてだ」という感想をいただき、参加した子どもからも、従来の「演劇」というイメージが覆された（自分達でもできる）という感想と、来年もまた開催して欲しいという声が非常に多く寄せられました。

神奈川県立青少年センター 職員向けワークショップ

12月8日(金)14:00～16:00 参加者:15名

「演劇ワークショップ」というと、一般には演技レッスン等を思い浮かべがちですが、「演劇のためのワークショップ」ではなく「演劇の手法を活かしたワークショップ」を舞台芸術課以外も含めた当館全体で体感する機会を設けました。

多田さんから、演劇とコミュニケーションについての簡単なレクチャーの後で、職員を4人ずつ4グループに分かれて、1分間で有名人の名前しりとりを行い、その時のやり取りをそのまま1分間で再現するなどの複数のプログラムを実施しました。

「演劇＝役者の演技」ではなく、他者とのコミュニケーションによって進行する演劇、他者への想像力を駆使する演劇という特性について、実際に職員が体感する機会となり、職員間の意識の共有を図ることができました。



アートでつなぐ親子の時間

「新聞ドームハウスをつくってみよう！」

12月9日(土)14:00～16:00 参加者:27名

綾瀬市役所315会議室

12月10日(日)14:30～16:30 参加者:27名

神奈川県立青少年センター多目的プラザ

当館は県立施設として、県内市町村からの事業の開催や派遣依頼に応える機会があります。綾瀬市青少年課から、当館の科学部に「親子の絆」というテーマでの企画の相談があった際に、今後の青少年向けプログラム開発の一環としてリージョナルシアターの機会を活用し、舞台芸術課が担当となった親子向けのワークショップを綾瀬市と当館の

2箇所で行いました。

各会場とも、小学生以上の親子27名で行いました。

企画段階で多田さんのアドバイスにより、敢えて「演劇」という言葉を使わない親子参加型のプログラムとして、一般に参加を呼びかけたところ、想定以上の応募が寄せられ、新しいニーズの掘り起こしの貴重な機会となりました。

プログラムの内容としては、1会場あたり3軒の新聞紙を繋ぎ合わせて扇風機で空気を送り入れて膨らませたドームハウスを建てるものですが、作業の過程では、親子だけではなく、異なる家族間で協力して大きなドームハウスを作る光景が生まれ、コミュニケーションが自然と促される様子が印象的でした。

ワークショップ全体を通じて、演劇の手法を活用することで、参加者が自発的に取り組むワークショップの意図が感じられ、また、無人島で家を建てることから最後に破壊するところまでのストーリー仕立てや音響等の工夫が加わったことで、参加者から寄せられた高い達成感と満足度に繋がったものと思われます。



フィードバックの論点

〈参加者〉

館長、担当者、アーティスト、アシスタント、地域創造

〈論点〉

- ・館長自身によって、今回の事業プログラムを来年度以降継続させていくための計画のプレゼンテーション。
- ・プレゼンテーションを受けてアーティスト、地域創造から意見、提案。
- ・意見、提案を受けて、事業計画の是正を確認、共有。

公平に芸術に触れる機会をつくる

フリースクールでの集中的なプログラム

今回は神奈川県青少年センターの舞台芸術課からの申し込みだったのですが、青少年センターには他に青少年支援・指導者育成を担当する指導者育成課、ひきこもりや不登校、非行などの相談、支援を担当するの青少年サポート課などもあり、担当者との打ち合わせを経て他部署との連携を事業の主軸にすることになりました。寄宿型私塾であるはじめ塾の子供達とのワークショップは非常に印象的でした。下見ではじめ塾を訪問するまでは不登校の子どもたちの寄宿型フリースクールという印象でしたが、実際行ってみると、不登校の子供と塾から登校している子供が共同生活をしていました。これは目から鱗で、通常の学校では不登校の子と普通に登校している子は接点がありません。しかしここでは彼らが自ら選択し学校へ行ったり行かなかったりしながら一緒に暮らしています。それだけでも「学び」に対する大きな学びがあるでしょう。実際のワークショップでも、誰が不登校で、誰が元不登校で、誰が普通に登校してるかは全くわかりませんでした。塾の方針も自ら考える力を育てるもので、ワークショップの内容も通常は中学生以上でないといけない内容でしたが、小学校低学年の子も全く遅れることなくこなし、不登校の子どもたちの問題というのはすでに塾の活動において解決していると感じました。演劇による体験は初めての子も多く、アンケートを読むと、演劇や人の多様性への気づきが多くあったようで（小学校低学年ですら！）、様々な可能性を感じることができました。

何のためのワークショップなのかを忘れないこと

以前もリージョナルシアター事業で保健室登校の子供たちとのワークショップを実施しましたが、ここ最近では通常の学校へのアウトリーチも必要ですが、さらにその先の芸術が届きにくいと

ころにいかにつけるか、そこで芸術ができることも多くあると感じています。マイノリティにこそ、というわけではありませんが、マイノリティだろうがマジョリティだろうが公平に芸術に触れる機会はあるべきでしょう。今回のリージョナルシアター事業を経て青少年サポート課と舞台芸術課との連携は来年度事業化することになりました。今後はセンターで開催される事業とアウトリーチとの連携を期待します。全国的にも例えばホールとフリースクール、特別支援学校との連携などはまだ数少なく、神奈川県青少年センターには、芸術による青少年育成の全国的なモデルとなる可能性を感じています。今回のプログラムとしては、青少年サポート課、指導者育成課、舞台芸術課の職員へのインリーチ、綾瀬市と横浜市での親子向け新聞ドームハウスワークショップを実施しました。インリーチでは演劇を使ったコミュニケーションワークショップを体験してもらいました。ワークショップの手法がある程度浸透してきた昨今、手法が先走り定型化してきていると感じています。多くの人が実施できることを考えれば悪くはありませんが、芸術を使ったワークショップとの区別についてはしっかり考えていかなければいけないでしょう。油断すると学校教育的になりがちな側面もありますので、そこは特に気をつけなくてはならないと感じています。

CASE 3 公益財団法人としま未来文化財団(東京都豊島区)

実施データ

実施団体	公益財団法人としま未来文化財団 プランセクション
実施ホール	なし
担当者	杉田隼人、佐々木千尋
派遣期間	1回目派遣 平成29年6月26日(月)～6月27日(火) 2回目派遣 平成29年9月28日(木)～9月30日(土) 3回目派遣 平成29年10月6日(金)～10月8日(日)
アーティスト等	アーティスト:田上豊 アシスタント:福田修志、菅原直樹、村井まどか
1回目派遣内容:	6月26日 打ち合わせ(豊島区内の現状、ワークショップ実施内容について現状の報告) 区内視察(豊島区内の視察、ワークショップ実施候補地の視察:子どもスキップ南池袋) 6月27日 打ち合わせ(実施概要の整理、スケジュール調整など) 区内視察(豊島区内の視察、ワークショップ実施候補地の視察:子どもスキップ池袋本町)
2回目派遣内容:	9月28日 打ち合わせ(実施内容確認) 9月29日 職員対象インリーチ(対象:財団および区介護課職員/参加人数:11名) 子どもスキップ朝日ワークショップ(対象:小学生/参加人数:16名) 9月30日 子どもスキップ池袋本町ワークショップ(対象:小学生/参加人数:19名)
3回目派遣内容:	10月6日 子どもスキップ職員対象インリーチ(対象:子どもスキップ職員/参加人数:14名) 子どもスキップ南池袋ワークショップ(対象:小学生/参加人数:14名) 10月7日 子ども交流ワークショップ(対象:小学生/参加人数:7名) 職員対象インリーチ(対象:財団職員/参加人数:20名) 10月8日 フィードバック

スケジュール

	1回目派遣		2回目派遣			3回目派遣		
	6/26	6/27	9/28	9/29	9/30	10/6	10/7	10/8
9:00								
10:00								
11:00		企画打合せ						フィードバック
12:00								
13:00				職員対象 インリーチ 12:00～14:00				
14:00		区内視察				子どもスキップ 職員対象 インリーチ 13:00～15:00	子ども交流WS 13:00～16:00	
15:00					子どもスキップ 池袋本町WS 14:00～15:30			
16:00								
17:00				子どもスキップ 朝日WS 16:00～17:30		子どもスキップ 南池袋WS 16:00～17:30		
18:00	企画打合せ							
19:00			打合せ					
20:00							職員対象 インリーチ 18:00～20:30	
21:00								

担当者の報告・評価

■ この事業への参加動機

「演劇のまち」を掲げ、演劇事業が活発に行われる豊島区において、これまで「演劇」に馴染みのなかった層にアプローチを展開することで、「演劇」との新たな出会いの創出を図る。同時に、当財団が所有する施設だけにとらわれず外部へとその活動の場を広げることで、生活文化や福祉そして芸術等様々な文化活動を行う人や、それらの活動を支援する人とのネットワーク形成を目指す。また、参加者のみならず、関係する職員自身が文化芸術活動の楽しさに触れ、より発展的な事業展開を行うための研修の場としても活用する。

■ 企画・実施において苦労した点

企画の練り直し

応募時には、高齢者を対象とした演劇ワークショップを検討していた。しかし、実施予定会場の急な改修工事や事業担当者の変更に伴い、対象や実施内容を検討していく上で、目的や期待する効果を「演劇ワークショップ」の企画として落とし込むことに苦戦した。第1回派遣の打ち合わせの場で、アーティストや地域創造の担当者より「難しく考えすぎず、担当が一番興味のあることをトライアルする場としてリジョナルシアター事業を活用すればいい。」とアドバイスもらった。そこで、演劇を届けたい対象を一から練り直し、放課後の子どもを対象としたプログラムを、区内小学校に併設する「子どもスキップ」にて実施することとなった。

参加者募集について

子どもを対象としたワークショップでは、当初対象を高学年と設定していたが、参加者がなかなか集まらなかった。参加者を募るために直接子どもスキップへ足を運ぶ中で、施設の特性として低学年の利用者が多いことや、子どもたちの様子など、施設職員へのヒアリングのみではわからなかった実態に気づくこととなった。参加者を増やすため低学年も対象に加えたが、今度は、低学年の子どもたちより「演劇って何?」「何して遊ぶの?」と問いかけることが増え、なかなか参加へとつなげられなかった。リサーチにあたってはデータ収集のみならず、子どもたちと直に関わり、子どもたちの知っているものや興味があるものなどを知り、ワークショップの内容を共有できる“共通言語”を創っていく必要性を痛感した。

■ プログラムを実施した成果

子どもを対象としたワークショップと、関係職員を対象とするインリーチの2本の柱で実施した。

子どもスキップでのワークショップ

子どもたちが自由になる「放課後」という時間で実施することで、遊びの一つとして「演劇」を提案することが出来た。参加者募集に関しては多くの課題が残るものの、「演劇」に馴染みのない子どもたちへのアプローチの第一歩を踏み出すことができた。

職員インリーチ

演劇ワークショップを通して、普段見られない姿や意見を職員同士が認め合うきっかけとなり、活発な意見交換を引き出すきっかけとなった。子どもスキップ職員対象のインリーチでは、次年度に事業の実施を希望される施設もあり、ネットワークの形成にもつなげることができた。

全体

本事業をきっかけに、「子どもスキップ」や区内NPO団体、区の関連部署等、新たな関係性を生み出すことができた。また、開催日や対象、宣伝など様々な問題に直面したことで、新たなアプローチを展開する際の課題に気づくことができた。

■ 今後の展望

今回のワークショップを足掛かりに、今後は区内22カ所の子どもスキップを持ち回りで展開し、区内全域の子どもたちに演劇と出会う機会を継続的に創出していきたい。さらに、2019年にオープンする新区民センターが、様々な舞台芸術に出会う場として機能していくことも視野にいれ、継続的なプログラム展開とアプローチ先の開拓を実施する。

プログラム詳細

職員対象インリーチ

9月29日(金)12:00～14:00

財団および区介護課職員を対象に、菅原直樹氏による「演劇と介護」ワークショップを実施。菅原氏の活動紹介にはじまり、認知症の方と介護者にわかれたロールプレイングを行った。

認知症の方との関わりは難しく考えてしまいがちだが、受け入れられることや認められることなど、「うれしい」と感じることはみな同じであると気づき、関わりへの足掛かりを見出すことができた。

事業応募時に企画していた高齢者対象ワークショップは、担当職員が高齢者と関わる経験の少なさから抵抗感があり見送りとしたが、このワークショップを通し身近な課題とすることができた。



子どもスキップ朝日ワークショップ

9月29日(金)16:00～17:30



子どもスキップでのワークショップは、「エンゲキで遊ぼう！」と題し、3カ所の会場にて各回異なるプログラムのワークショップを行った。

子どもスキップ朝日では、田上豊氏がメインのアーティストとしてモニター・ジュ画を描くプログラムを実施。

ペアを組み、一人が別室に待機しているモデルを観察し、

その容姿を言葉で友達に伝える。もう一人は伝えられた言葉を頼りに、モデルの顔を描くというプログラム。制限時間いっぱいモデルを観察する子や、すぐに部屋に戻り友達に伝える子など、反応は様々であった。さらに背を向けた女性の表情をそれぞれが想像で描き、他の参加者に「なぜ、女性は悲しんでいるのか」というエピソードと共に、絵の発表も行った。

参加者のほとんどが低学年であり、常に賑やかな状態であったが、友達の描いた絵や物語の発表には真剣に耳をかたむける姿が印象的であった。

子どもスキップ池袋本町ワークショップ

9月30日(土)14:00～15:30

子どもスキップ池袋本町では、福田修志氏がメインのアーティストとして、風景写真などを使用した物語を生み出すワークショップを実施。

創作した物語の発表の段になり、あるグループで写真を指差し「ここに小さな緑のスイッチがあります。」と物語を話すと、子どもたちが一斉に写真に詰め寄りボタンを探し始めた。前半でこそはしゃぎまわっていた子どもたちだが、ワークショップを通して、自身の発表への緊張感や楽しさとともに、ほかの子どものたちの発表への関心が高まっていることが窺えた。



子どもスキップ職員対象インリーチ

10月6日(金)13:00～15:00

子どもスキップで実施した事業を、子どもスキップの職員や区の所管課の職員が体験するインリーチを実施。

ワークショップの導入部分を田上氏がメインで進行。ジャンケンゲームなど遊び感覚で演劇を楽しみ、会場の雰囲気や和ませながらも、「演劇ワークショップ」について説明をはさみながら進行。後半は福田氏による風景写真などを使用した物語を生み出すワークショップを行った。

参加者から「“演じ合う”“助け合う”“伝え合う”ことの大切さや面白さを感じた」「やさしい世界で遊ばせてもらった。ぜひ、子どもたちに体験させたい」「(現場で) 応用のきく

内容だった」等、活発な意見が出て、子どもスキップでのワークショップ展開への関心を高めることができた。



子どもスキップ南池袋ワークショップ

10月6日(金)16:00~17:30

子どもスキップ南池袋では、村井まどか氏がメインのアーティストとして、ジェスチャーゲーム等、遊び感覚で演劇を体験するプログラムを実施。

開始当初は騒ぐ子どもが多くみられたが、後半のジェスチャー発表の際には、積極的にアイデアを出したり、的確なジャスチャーを褒めあったりなど、表現の楽しさや難しさを感じているようであった。

参加前は「演劇なんてつままない。」と言っていた子どもが、帰りがけには、「演劇もなかなか面白い。参加してよかった。」と声を掛けてくれた。



子ども交流ワークショップ

10月7日(土)13:00~16:00

3カ所の子どもスキップで開催した「エンゲキで遊ぼう！」に続き、地域の異なる子どもたちが交流することを目的としたワークショップを実施。

企画段階では子どもスキップでのワークショップ参加者を想定していたが、対象を区内小学生へと拡大した。

ジャンケンゲームやジェスチャーゲーム等、遊び感覚で演劇を体験した後、簡単なテキストを使用した作品創りを行った。3時間という長時間であったが、参加者の集中力

も途切れることなくプログラムが進行した。

区内NPO法人にも声掛けしたところ反応があり、後に話を聞くと「普段はワークショップ等への参加機会も少なく、大変楽しかった。」との声を聞くことができた。直前での声かけであったが、新たなネットワークの拡大にもつながることができた。



職員対象インリーチ

10月7日(土)18:00~20:30

財団職員および区の職員を対象としたインリーチを実施。子どもスキップ等で実施したワークショップを講師陣の説明をはさみながら展開。職員間での事業の意義や可能性を認識し共有することをねらいとした。

区職員からは「伝える難しさや楽しさが体験できた。文化事業のみならず、職員研修などにも取り入れられないかと想像が膨らみ、参加してとても有意義だった。」との反応を得られた。

また、職員間では普段見られないお互いの姿や発想に触れ、共有する楽しさを体感するきっかけとなり、リージョナルシアター事業の総括的な役割を果たすプログラムであった。

フィードバック報告

〈参加者〉

担当者、アーティスト、アシスタント、地域創造

〈論点〉

- ・演劇WSに初めて取り組んで、実施前と実施後に感じていたことの違いについて。
- ・インリーチの効果について。
- ・子どもスキップアウトリーチの継続に向けて意見交換。
- ・WSの対象者を見定めて、問題点を汲みだして、アーティストに伝え、プログラミングするコーディネートの面白さについて。

主体的に課題に取り組む

事業のミッションを定める

大都会、皆さんご存知の「豊島区」。JR山手線の外回りで言うと、目白駅から（池袋、大塚、巣鴨等を通じて）駒込駅くらいまで網羅しています。私自身、これまでに地域創造のリージョナルシアター事業では、地方の山間部や沿岸部などでこれまで頑張ってきたものですから、これまでと随分勝手が違う感じもありましたが、都市部には都市部の悩みや問題を改めて知る良き機会となりました。この度のお相手、としま未来文化財団は、この事業（アウトリーチ）の大きな柱として、小学校の学童組織を対象にワークショップを行うことにしました。この対象へのワークショップは、私たちアーティストに新しい課題を見出してくれました。

振り返ってみれば、としま未来文化財団が「学童に通う子どもたち」という対象者を提示して来たのは、結構いろいろなやり取りを行った末だったと思います。それくらい長い時間をかけて、みらい文化財団の職員の方（今回は二人）は、「どんな対象者に行うのか、なぜその対象者なのか、さらにその上でワークショップの目的は何なのか」という問いかけを我々から受けながら、事業のミッションを定めることに苦労していました。本来ならば、そんな苦労は負わせたくないし、こちらから、あーしてこーしてと指示を出せばすぐに済むことなのかもしれません。しかし、その地域のことは、担当者（職員）が一番知っていなくてはならないと思っていますし、その上でその地域の問題意識をもって対象者を設定しないとワークショップとしてあまり実りが無いのではないかと、そんなことを（演劇アウトリーチが初めてだという）担当者のお二人に説明しながら摺り合わせを重ねました。その結果、豊島区という演劇ワークショップが毎日どこかで行われているようなこの大都会で、網の目をかいくぐる様にこの対象者（学童に通う子どもたち）がひねり出されたのです。

「都会の陰に寂しき子どもがたくさんいる」。このことが、アーティスト、地域創造、としま未来文化財団担当者の三者の中で大きな問題意識として共有され、立ち向かうべきミッションとなりました。このように、単なるホール（劇場や財団など）との発注と受注（アーティスト）の関係を越えて地域のミッションを共有すること、またその後においてミッションに対し、それぞれの立場の力を駆使して総合力で立ち向かう在り方は、アウトリーチにおける未来へ向けた創造的で有機的な活動だと思っています。

これから演劇のワークショップを始めるには

これからアウトリーチ（ワークショップ）の事業をお考えの方にお願ひしたいことは、主体的な意識を持っていただくことだと思います。地域のことを把握し、どこに問題を感じているのかを割り出し、その上でどんなアウトリーチが有効なのか、地域還元が出来るのかを考える。以上のようなことを、アーティストとの協働作業の前の第一ステップとしてしっかり捉えていただくこと。また、もう少し欲を出して申し上げれば、だからこそ、「あなたにお願ひしたい」と言われて依頼を受ける方がアーティストとしては、やる気のスイッチが入ります。決してアーティスト任せにして受け身にならず、能動的に取り組んで頂くことが「やりがい」を発生させ、事業に対して前向きになれるコツだと思います。

最後に、としま未来文化財団の職員の方は、わたしたちとの実施を経て、演劇アウトリーチの「未経験者」から「経験者」へと生まれ変わりました。その経験を生かして、豊島区のためにさらなる次の飛躍を願っています。難攻不落の学童ワークショップ、しかと勉強させていただきましたので、今度はもっと強くなって戻ってきたいと思っています。

CASE 4 三次市民ホールきりり(広島県三次市)

実施データ

実施団体	三次市民ホール事業運営委員会		
実施ホール	三次市民ホールきりり		
担当者	竹内ひとみ, 前岡美由紀		
派遣期間	1回目派遣 平成29年7月3日(月)～7月4日(火)		
	2回目派遣 平成29年7月28日(金)～7月31日(月)		
	3回目派遣 平成29年9月4日(月)～9月7日(木)		
アーティスト等	アーティスト：多田淳之介 アシスタント：藤岡武洋、橋本清		
1回目派遣内容：	7月 3日 会場下見・まち歩き WS 下見・地元ケーブルテレビ/新聞社取材・小学校下見 (2校) 7月 4日 教育長表敬訪問・小学校下見 (2校)		
2回目派遣内容：	7月 29日 13:30-15:30 きりりで遊ぼう (小学生対象ワークショップ/参加者：18人) 7月 30日 13:30-16:30 三次のCMをつくろう (一般対象ワークショップ/参加者：6人) 7月 31日 10:00-12:00 小・中学校教職員向けワークショップ (参加者：13人)		
3回目派遣内容：	9月 5日 10:40-12:15 三和小学校3・4年生対象ワークショップ (参加者：31人) 14:00-15:30 田幸小学校3～6年生対象ワークショップ (参加者：30人) 19:00-21:00 三次のCMをつくろう (一般対象ワークショップ/参加者：6人) 9月 6日 9:35-11:05 川地小学校4～6年生対象ワークショップ (参加者：37人) 13:30-15:00 川西小学校全校対象ワークショップ (参加者：36人) 19:00-21:00 三次のCMをつくろう (一般対象ワークショップ/参加者：5人) 9月 7日 9:30-11:30 フィードバック		

スケジュール

	1回目派遣		2回目派遣			3回目派遣		
	7/3	7/4	7/29	7/30	7/31	9/5	9/6	9/7
9:00								
10:00		表敬訪問					小学校4～6年対象WS 9:35～11:05	フィードバック
11:00		小学校下見			教員対象WS 10:00～12:00	小学校3・4年対象WS 10:40～12:15		
12:00								
13:00		小学校下見						
14:00	まち歩き下見 TV取材	ヒアリング	小学生対象 公募WS 13:30～15:30	一般公募 13:30～16:30		小学校3～6年 対象WS 14:00～15:30	小学校1～6年 対象WS 13:30～15:00	
15:00								
16:00	小学校下見							
17:00								
18:00	小学校下見							
19:00								
20:00						一般公募 19:00～21:00	一般公募 19:00～21:00	
21:00								

担当者の報告・評価

■ この事業への参加動機

三次市は中山間地域にあり、過疎化・高齢化が進んでおり、若者が進学・就職で土地を離れる傾向が進んでいます。当館はホール開館3年目となりますが、まだ地域の人になじみの薄いことが課題です。ホールが公演等を鑑賞する場所としてだけでなく、継続的に人をつなぐ場所・関われる場所として取り組み、地域の魅力をあげることができないかと考えていた際に、人に注目した演劇ワークショップを知り、このプログラムづくりがきっかけとなるのではないかと考えていましたが、制作型事業の経験も少ない中、どう取り組めばよいか思案していました。そんな中リージョナルシアターを知り、アーティストと時間をかけて企画をつくれること・過程でノウハウを得られることを魅力に感じ、応募しました。

■ 企画・実施において苦労した点

「なぜホールで『遊ぶ場』をつくるのか」「なぜ学校にアウトリーチするのか」等、どうしてこの事業をつくるのか、「言葉にすること」「伝えること」がこんなに難しいことだったとは。すべてが初めてのプログラムで、1つ1つのアドバイスに考え悩みながら進みましたが、アウトリーチ先は予想を超える応募があり、コミュニケーションを課題とする学校のニーズを感じた一方で、教職員向けWSで体験学校側が求めているもの（演技指導など）とこちらが意図しているものの違いを十分に説明できず、アーティストやスタッフの皆さんに助けて頂く部分もありました。ホール職員に対しても、このプログラムを実施する際に「なぜこういった事業に取り組まなければならないのか（買取公演との違い）」が共有できたか疑問が残る面もありました。

■ プログラムを実施した成果

一番の成果は、様々な立場の人と話す機会を得たことです。下見の際、まちづくりに関わっている方、地元劇団の方に会い、じっくり話を伺いました。フィードバックに、ホールに関わるボランティア・合唱団・文化団体の方数人にも参加して頂き、ホールに関わる人が、ホールについて話す場が今までなかったこと・皆こうして対話する機会を求めていたことに気づく機会にもなりました。一般公募WSの最後、このプログラムで初めて会った参加者が、「参加できて嬉しかった。また会おう」と帰っていくのを見て、ホールがそういう出会いが創出できる場でありたいと思いました。プログラム・下見・反省会と非常にタイトなスケジュールでしたが、多田さん方が時間をかけて三次にむきあってくださった分、これから地域にいる私たちがコーディネーターとなり、人とのつながりが価値となるようなプログラムをつくりあげていきたいと思います。

■ 今後の展望

今回行ったプログラムで目指した『ホールが、「原っぱ」のようにふらりと訪れても誰かと会い、楽しいことを見つけられる場所となること、文化の視点から地域の価値を高める機会の提供』を今後も考えていきたいと考えています。その為に、今回のプログラムの継続とともに、対話を軸としたプログラムの実施を様々な人を巻き込む仕組みをつくりたいと思います。

プログラム詳細



小学生対象公募ワークショップ

7月29日(土)13:30~15:30

一般公募で集まった小学校1年~6年18人を対象に、ホールに公演鑑賞等の目的がある時だけ訪れるのではなく、目的なく訪れても、誰かに会え、楽しめるような原っぱのような場所になることを目指し、「ホールで演出家と一緒に遊ぼう!」と募集をかけたところ、募集後4日で定員が一杯になり、子どもに対する新たなニーズを発見できました。

段ボールで家をつくる、紙コップを崩すなど家ではできない遊びだけでなく、多田さんが提案した『だるまさんが転んだ』をやっているうちに、「参加者が動いていないか観察する」という子ども達の中で自然と新たなルールが生まれました。そういった体験を通して想像力を刺激し、新しい友達をつくる場になったように思います。

小・中学校教職員対象ワークショップ

7月31日(月)10:00~12:00



三次市内では学校で演劇ワークショップ実施したことがなかったため、三次市内小中学校教職員を対象に、演劇ワークショップを実際に体験し、教育現場での活用の際して理解を深めて頂くために実施しました。

エア大縄跳び・逆じゃんけん握手・ランダムウォーク

(空間認識)・喋らずにみんなで1つの形をつくる・喋って形を整える等、アイコンタクト・ジェスチャーなどを使いながらゲームをこなしました。その後、チーム内で話し合いながら三次の良さを伝えるCMをつくりました。参加者の年代も様々でしたが、それぞれがコミュニケーションをとりながらひとつのものをつくっている姿が印象的でした。参加者の中には3回目派遣で行く小学校の先生もいらっしやり、どんなことをするのかイメージをつかんで頂きやすく、今後のホールと学校現場をつなげる第一歩となったように感じました。

小学生対象ワークショップ

9月5日(火)

三和小学校3・4年生 10:40~12:15

田幸小学校3~6年生 14:00~15:30

9月6日(水)

川地小学校4~6年生 9:35~11:05

川西小学校1~6年生 13:30~15:00



グループでヘビやネコなどの動物を身体でつくり、多田さんからの「この動物は何を食べる?」「すごいところはどこ?」などの質問に子どもたちが即興で答える際に、最初は「わからない」と答えていた子ども達が、だんだん質問されても思ったことを口に出し始め、他の意見を興味深くきいていたことが印象的でした。

今回の4校全てが全校生徒90人以下の小規模校で、少人数で活動しているせいか、初対面の人とのコミュニケーションが課題だと言われていましたが、どの学校もいきいきとしており、先生方も「生徒が楽しそうに素直に身体を使って表現していた」「楽しそうでびっくりした」という声を頂きました。学校側への主旨説明が十分ではなかったと反省する面もありましたが、今後も学校と連携し、プログラムを届けていけたらと願っています。

一般対象ワークショップ

7月30日(日)13:30～16:30

9月5日(火)19:00～21:00

9月6日(水)19:00～21:00

演劇の『物語を生む』手法を使って自分の思うまちの魅力をつたえるコマーシャルをつくることで、作業の中で今後のまちづくりにいかす要素を発見するための企画を行いました。

1回目はモデルケースとして古い街並みの残る三次町本通りをまち歩きしながら街の魅力を探りました。古びた路地・住宅・川など、一見何の変哲もない場所を通りながら、「子どもの頃、この路地を通るとお店があり、楽しいことが広がっていた」「川の音が好きだった」など、思い出や日常の風景を再確認したものを魅力として伝えるために寸劇をつくりました。

2回目では、前回の宿題である「街のすきな場所をみつめてくる」という宿題を基に各自が発表を行い、情報共有した。観光スポットだけではなく、生活をしている日常の風景である「川」や「路地」、「建物」など住んでいるからこそわかる魅力を共有することができたように思います。一見雑談で終始したようにみえる2時間だったが、過去の思い出などの個人的な体験談や思いを聞くことで、新たな魅力の発見や思いの共有を通して参加者同士の距離を縮める機会となりました。

最終回では、最後が『ありがとう、三次』でおわる三次への手紙を書き発表した。生まれてから一度もこの土地から出たことがなかったが、隣に越してきた外国人から「3つの川があつまる場所は『聖地』だ」と言われてはじめて、当たり前前の景色が価値あるものに気づいたという手紙、転勤を機にやってきて30年余りを過ごした思い出のつまった手紙、仕事が決まり越してきて、「自分を受け入れてくれてありがとう」という感謝をこめた手紙など、自分の目線から街をみるとそれぞれ違った感情や思い出がつまった手紙ができあがり、発表を聞く人たちにとっても新たな価値の発見につながったように思います。



フィードバック報告

〈参加者〉

所長、館長代理、担当者、市民ボランティア団体メンバー、文化連盟、市内芸術団体、アーティスト、アシスタント、地域創造

〈論点〉

- ・ホール運営計画を紐解き、ホールの設置目的、ミッションなどと、今回の事業プログラムと関連付けながら整理。
- ・派遣アーティスト・多田淳之介が芸術監督を務めるキラリ☆ふじみの市民参加事業の紹介。
- ・ホールを市民サイドからサポートする立場の方々を交えた意見交換。

街の魅力を知ることがホールを支える

地域のステークホルダーとの連携

三次市民ホールきりりは開館してまだ数年、担当者も非常に熱心で、リージョナルシアター事業以前にもホール関係者向けのインリーチワークショップを一度やらせてもらっていました。しかしホール現状としては担当者の熱意とホール幹部の意識がかみ合っていないという全国多くのホールで起こっている状況でした。今回のリージョナルシアター事業ではホール関係者の意識改革はもちろん、ホール外部からの働きかけによってホール運営を改善したいという担当者の思いもあり、地域のステークホルダーとホールの連携を裏テーマとしました。事業内容としては、学校アウトリーチ、教員向けインリーチ、小学生向け遊び場づくり、三回連続の地域CMづくりワークショップを実施しました。小学校アウトリーチはホールとして初の試みでしたが事業の枠を超える応募があり、地域に潜在的なニーズがあったことがわかりました。加えて実施校全ての教員が事前の教員向けインリーチに参加してもらえたことで、生徒たちへの事前事後フォローも含めたスムーズな実施につながりました。小学生向けの遊び場も、今後ホール職員だけでも継続可能な事業モデルとして実施しました。子供達の参加も多く、今後継続することができれば、地域に開いたホール運営の一端を担えるのではないかと感じました。地域CMづくりのワークショップでは、こちらも今後の継続を見越して「まちのつたえかたプロジェクト」の第一弾としての実施という形にしました。地域で活動している人材、地域での活動に興味のある人材の発掘も目標としました。第一回目の実施ではあまり多くの参加は叶わず、引き続き二回目からの参加者も募集しました。内容はTVCMのようなものを作るわけではなく、街のどこに魅力を感じ、どのようにその魅力を伝えるかということテーマにしたワークショップでした。最終的には参加者それぞれが三次に宛て

て手紙を書き、朗読発表しました。結果的には地域での活動に積極的なメンバーが集まりワークショップの中でお互いの活動のエクステンションも行われ、今後の「まちのつたえかたプロジェクト」を牽引していくコアメンバーとなる可能性を感じました。

ホールの方向性を皆で探る

今回の事業の本丸として、事業後のフィードバックにホール幹部、地域のステークホルダーを集め、今回の事業の振り返りから、ホールの設置目的を基に開館以来のホールの活動、今後のホールの方向性についてのプレストを行いました。地域からの参加者の話を聞くと、開館以来こういう集まりが無く、今後こういった場を継続的に開いて欲しいという声が多く聞かれました。リージョナルシアター事業終了後もこの集まりは開かれたそうです。今回の事業自体は今後のホールの方向性を見据えたものとなったと感じていますが、どこまで今回の事業が活用されるかは担当者レベルではどうにもならないという現実是非常に感じました。その予感的中し今回の担当者はホールを退職されるそうです。今回の経験が他の場所で成就してくれることを願います。

picup photos



☆カ-70と「ラボ」

市役所

図書館

ギャラリー

ホール

- ・ゼリリーでカ-70 絵本づくり
- ・1日職員
- ・100グリ、クビュ-イグ
- ☆CM作り
- ・夏休みの子どもたちがCMに出る(自然とつて)
- ・1階を活用
- ☆小さいころから...
- ・ワークショップ(利用者が高校生まで)
- ・「木」とふれあえる場所づくり→ア-キコトコトエ
- ・つなげる場

CASE 5 はつかいち文化ホール(広島県廿日市市)

実施データ

実施団体	(公財) 廿日市市文化スポーツ振興事業団
実施ホール	はつかいち文化ホール
担当者	田雁尚美
派遣期間	1回目派遣 平成29年7月5日(水)～7月6日(木) 2回目派遣 平成29年8月2日(水)～8月5日(土) 3回目派遣 平成29年11月7日(木)～11月10日(金)
アーティスト等	アーティスト:有門正太郎 アシスタント:脇内圭介、藤松妙子(2回目派遣)、守田慎之介、高野由紀子(3回目派遣)
1回目派遣内容:	7月5日 企画内容打合せ、アウトリーチ先(宮島小学校)下見、市内視察 7月6日 企画内容打合せ、アウトリーチ先(原小学校)・ワークショップ会場下見
2回目派遣内容:	8月3日 13:30～15:30 小学生対象WS 参加者:12名 (会場は全てリハーサル室) 18:30～21:00 一般対象演劇WS 参加者:10名 8月4日 13:30～16:30 親子対象WS 参加者:14名 18:30～21:00 一般対象演劇WS 参加者:12名
3回目派遣内容:	11月8日 14:00～15:40 廿日市市立宮島小学校アウトリーチ 対象:4年～6年、参加者:30名、会場:多目的室 18:00～20:00 財団職員及び市役所職員インリーチ 参加者:9名、会場:大ホール舞台 11月9日 10:45～12:20 廿日市市立原小学校アウトリーチ 対象:3年～6年(複式学級)、参加者:29名、会場:音楽室

スケジュール

	1回目派遣		2回目派遣		3回目派遣	
	7/5	7/6	8/3	8/4	11/8	11/9
9:00						
10:00						
11:00		原小学校 下見・打合せ				原小学校 アウトリーチ 10:45～12:20
12:00						
13:00						
14:00	ホール打合せ	ホール下見 打合せ	小学生対象 公募WS 13:30～15:30	親子対象 公募WS 13:30～16:30	宮島小学校 アウトリーチ 14:00～15:40	フィード バック
15:00						
16:00	宮島小学校 下見・打合せ					
17:00						
18:00						
19:00					職員 インリーチ 18:00～20:00	
20:00			一般対象 公募WS 18:30～21:00	一般対象 公募WS 18:30～21:00		
21:00						

担当者の報告・評価

■ この事業への参加動機

廿日市市では、活動している演劇団体も少なく、演劇の分野においてはまだまだ発展途上である。またこれまで鑑賞事業に特化し、育成・創造といった分野が課題となっていたことから、近年は演劇を通じた育成・創造の取り組みを目指している。特にこれからの社会を担う子ども・青少年の人材育成に力を入れることを目標にしている。ホールがその目標を達成する為には、地域のコミュニケーション、連携、パワーが不可欠である。演劇を通じてそれらを生み出すヒントを得る事に期待して参加した。

■ 企画・実施において苦労した点

参加動機はあるものの漠然としたイメージだったので、具体的に何をどうしたいか、ワークショップの対象をどうするか、ということがなかなか明確にならず、自分の中でも方向性を見い出せず苦労した。ホールや担当者としての課題は何か、というところから問い直すこととなった。今回の派遣アーティストである有門さんをはじめ、アシスタントや地域創造と話すことで、自分の課題、ホールの課題をひとつずつアウトプットし優先すべきことが明確になっていったが、これにはかなり時間を要した。

“ここ廿日市で、「演劇」に関心のある方の為だけに「演劇ワークショップ」をするのではない”ということ念頭におき、このワークショップはイマジネーションすることを体験し、楽しむ内容であることを一般の方に伝えることに苦労した。併せて今後に繋げる為にはどのようにすればよいか考えながら取り組むことに留意した。

■ プログラムを実施した成果

有門さんのワークショップは一貫して、想像力をはたらかせること、目にみえないものを見る・感じる、それを表現することである。廿日市オリジナルとして、廿日市が発祥とされる「けん玉」を使ったワークを取り入れた。けん玉の技は出来ない初心者でも「けん玉で新しい遊びを作る」、「けん玉の遊びや技に新しい名前を考える」といったワークを実施することで、大人も子どもも集中して楽しめた。廿日市らしいワークショップであり、新しいけん玉の魅力を感じることができた。

親子向けのワークショップは、夏休み企画で市外からの参加者も多く、子ども目線の色々な発想がとても楽しく、頭が柔らかくなった気がするといった反響だった。市外からの参加者は、「廿日市でこのような内容のワークショップがあるとは」と驚き、継続を望む声が多くあった。

アウトリーチでは、正しい答えを導き出す学校の指導と違い、想像することは自由、みんなの表現は全部正解という世界を体験したが、豊かな発想力で個性が表れていた。また、有門さんが事前に撮影しておいた学校内のとある箇所の画像を使ったことで、身近なものを違った視点で観てみるということに関心を持ってもらえたと思う。

職員アウトリーチは、複合施設の為、同じ敷地で別々の仕事を縦割りですしているものが、まずは横の繋がりをつくりたいと思い、実施を希望した。それぞれの課題や夢を語ることで、今後スケールメリットを活かした事業や行事を展開する事が出来ないか、多くのヒントを得ることが出来た。

■ 今後の展望

ホールとして誰を対象に何をするのか、自身の考えが定まらず悩みながら進んだが、終了後は得たことがとても多かったと感じている。「演劇の手法を使っのワークショップ」と一言で言うが、様々なものがある。この事業を通じて、想像力をフルに働かせること、遊んでみるこ、色々な意見を受け入れること、他の方向からみるこ、俯瞰することなど、改めてホールで事業を担当する自身にも必要を感じた。同時に、このワークショップやアウトリーチが漢方薬のようにじわじわともたらず効果と可能性を強く信じている。有門さんに「協力者（味方）を得ることが必要」と言われたが、近くにたくさんいることに気づいた。ここで得たことは、次に繋げていくことが大切であり、実行していきたいと思う。

プログラム詳細



公募 ワークショップ

8月3日(木) 13:30～15:30 小学生対象

8月4日(金) 13:30～16:30 親子対象

3日は、廿日市が発祥とされる「けん玉」で“新しい遊びを発見してみる”という趣旨で取り組んだ。誰でもできる遊びを考えたり、けん玉積み木のタイトルを考えたり、「技」が出来ない初心者でも楽しめる内容だった。

4日は、グループに分かれ施設内を巡り、気になる箇所の写真を撮り、“それが何に見えるか”を想像し、それに近づくよう写真に絵をかき、タイトルをつけて発表した。

両日にわたって共通しているのは、自由に創造する、答えは一つではない、ということだった。

面白い発想が次々出て、まさに“みんなちがってみんないい”を体感することが出来た。

一般公募 ワークショップ

8月3日(木) 18:30～21:00

8月4日(金) 18:30～21:00



演劇の手法を使った初心者向けのWSを実施。

3日は、シアターゲーム後、小学生向けWSに引き続き、けん玉を使ってけん玉積み木のタイトルを考えたり、写真にタイトルをつけ、グループでストーリーを作って発表した。

4日は、ミュージカル経験者が多かったので、経験者向けの内容も取り入れた。目を閉じてのゲームでは、その時の心の動きがどうだったか考えたり、その設定をどう楽しむか、といった内容だった。また、有門さん作の「いいもの」の台本を使い、設定された人物像になりきり、2人一組で、ショートストーリーを演じてみた。

小学校アウトリーチ

11月8日(水) 14:00～15:40 宮島小学校

11月9日(木) 10:45～12:20 原小学校

両校は其々歴史があり地域とのつながりが強く、廿日市の中でも特徴ある地域の小規模校である。

宮島小は小中一貫校、原小は複式学級で、どちらも家庭的な雰囲気の学校である。

自己紹介で少し打ち解けたタイミングで、有門さんの「ういろう売り」の口上が始まると、一変、空気が締め、集中して聞き入っていることが伝わった。

次にだまし絵がどう見えるか自由に意見を出したり、事前に有門さんが撮影しておいた学校の中の「とある場所、箇所」の写真が何に見えるか、自由に絵で書き足してタイトルをつけて発表した。もとは同じ写真なのに、捉え方が色々で力作揃いだった。その発想力に驚かされた。見えないものをみる力、想像して表現してみるといった時間を一緒に楽しむ事ができた。



職員インリーチ

11月8日(水) 18:00～20:00

さくらびあは、市役所、図書館、ギャラリーとの複合施設の中にあるが、そのスケールメリットが十分活かされていないので、まずは各職員がどのような仕事をし、どんな課題をかかえ、今後どうなると良いと思っているか共有する為、職員インリーチを実施した。

アイスブレイクの後、グループに分かれ、どんなことをしてみたいか夢を語り、どの部署とどう組めば可能性があるのか、具体的に話した。“子育てしやすい廿日市”を掲げていることもあり、「ギャラリーでカーブ絵本づくり」、「子どもたちとCMを作る」、「木工のまち廿日市として木とふ

れあえる場所づくり」などの案が出た。

短い時間ではあるが、互いにヒントになる意見が出て、多いに可能性を感じた時間となった。



フィードバック報告

〈参加者〉

担当者、アーティスト、アシスタント、地域創造

〈論点〉

- ・職員や公募WSの参加者、アウトリーチ先の教員と今後もどのように繋がっていくか。
- ・財団だけでなく、市民、地域を巻き込み方について。
- ・市役所、図書館、ギャラリー併設のスケールメリットをどう生かしていくか。

土壌が揃っている地域だからこそ求められる人と街との繋がり

人口11万5千人の広島県廿日市市（はつかいち）は広島市の西に隣接し2005年に世界遺産の厳島神社のある宮島も廿日市市に合併された瀬戸内海に面した港町である。木工業も盛んであった背景もあり「けん玉発祥の地」としても広報活動しています。

立地の特性を活かしたアプローチ

4月の研修会では前任担当者の移動に伴い、新たにこのリージョナルの位置づけとホールにどのような課題があるのかを改めて話し合う場からスタートしました。最終的に「子ども」「連携」をテーマに進めました。

今まで演劇ワークショップなど積極的に行ってきた背景からか、ワークショップ参加者の演劇を求めている力を凄く感じました、担当者も新しい発見もあったようです。前任者とは知り合いだった方もいて、参加者の方々との意見交換も今後活かせる事も多く有意義でした。演劇アウトリーチは初めてでしたが、アクティブラーニングという言葉が良く叫ばれる様になった昨今、2校ともに校長先生含め「今後も必要だ」と強くおっしゃっていた事をホール側がどう展開して行くかが今後の課題と感じました。

また、ホールを飛び出して芸術を届けることの意味、アーティストにとってアウトリーチと創作活動が相互関係を担保できているプログラムなのかを「目利き」になってアーティストと関係を作りたいと思います。

立地を生かし連携プログラムを実施することによって、初めての出会いの場、さくらびあだから出来るアプローチを立場を超えて話せる場は、有意義でホール職員の強い味方が近くにいる事、そして新しい課題が明確になった様でした。

市民の声を具体的な形へ

実施すると全てにおいて演劇的アプローチを必要としている熱い市民の皆さんと出会う事になり、こ

れをきっかけにどう展開して行くのが楽しみです。だからこそ、ホール職員が演劇を使い鑑賞型以外の形で演劇を使いどう展開して行くか、長期的なビジョンが必要不可欠と感じています。

今回、担当者の方とは密にお話ししながら進めてきましたが、このリージョナルシアターがホールとしてどう受け止めてどう感じ今後この経験をどう展開して行くかを話し合える環境が一人でも多くの職員と出来ることを願っています。市民の熱とホール側の温度差を担当者一人で切り盛りしている様に見えました。そこを改善出来る仲間づくりの機会に今回のリージョナルがなれば嬉しく思っています。

「演劇」と一言で言えてしまうから

演劇には様々な顔を持っていると思います。質の良い公演を提供する事も大切です。ですが、演劇には他の顔が多数に存在しています。想像性、コミュニケーション、創作活動、受信、発信……どれも日常生活に置いて必要不可欠です。意識の高い、興味を持っている市民が多いからこそ、演劇を使いどう市民と向き合い、どう展開して行くか、さくらびあは次のステップへ上がる段階にある様に思いました。そしてしっかりと対話しながら進めばきっと出来る環境にあるとも感じました。

この立地だから出来るさくらびあオリジナルなプログラムをどんどん楽しみながら市民とともに展開して欲しいです。そして、これまで撒いていたタネが少しずつ芽を出し始めているとも感じました。続けることは何よりも体力が必要ですが、今回できた仲間を頼ってもっともっと演劇で遊び、演劇で成長して行くさくらびあを見てみたいと感じる日々でした。

けん玉の発祥の地、はつかいち。今回作った「けん玉演劇ワークショップ」を胸をはって僕も全国で展開して行きたいと思っています。

CASE 6 高岡市民会館(富山県高岡市)

実施データ

実施団体	(公財) 高岡市民文化振興事業団
実施ホール	高岡市民会館
担当者	小林法子
派遣期間	1回目派遣 平成29年7月12日(水)～7月14日(金) 2回目派遣 平成29年8月16日(水)～8月19日(土) 3回目派遣 平成30年1月31日(水)～2月3日(土)
アーティスト等	アーティスト:有門正太郎 アシスタント:守田慎之介、高野由紀子(2回目派遣)、加賀田浩二(3回目派遣)
1回目派遣内容:	7月13日 市内巡察、アウトリーチ会場下見、打ち合わせ 7月14日 ホール下見、アウトリーチ会場下見、打ち合わせ
2回目派遣内容:	8月17日 10:00～11:30 南条校下児童育成クラブアウトリーチ①(参加者:19名) 13:30～15:00 南条校下児童育成クラブアウトリーチ②(参加者:19名) 8月18日 10:00～11:30 東五位校下児童育成クラブアウトリーチ①(参加者:27名) 13:30～15:00 東五位校下児童育成クラブアウトリーチ②(参加者:28名) 8月19日 10:00～12:00 小学校4～6年生対象ワークショップ(参加者:9名)
3回目派遣内容:	2月1日 10:45～12:20 高岡市立石堤小学校アウトリーチ①(対象:1～3年生/24名) 13:45～15:20 高岡市立石堤小学校アウトリーチ②(対象:4～6年生/28名) 2月2日 12:50～16:00 高岡第一学園幼稚園教諭・保育士養成所アウトリーチ(対象:2年生/36名)

スケジュール

	1回目派遣		2回目派遣			3回目派遣	
	7/13	7/14	8/17	8/18	8/19	2/1	2/2
9:00							
10:00	市内巡察	幼稚園教諭・ 保育士養成所 会場下見	南条校下児童 育成クラブ アウトリーチ① 10:00～11:30	東五位校下児童 育成クラブ アウトリーチ① 10:00～11:30	小学生 4～6年生 対象公募WS 10:00～12:00	石堤小アウト リーチ① 10:45～12:20	
11:00							
12:00							
13:00		ホール下見 打ち合わせ	南条校下児童 育成クラブ アウトリーチ② 13:30～15:00	東五位校下児童 育成クラブ アウトリーチ② 13:30～15:00	全体 フィードバック	石堤小アウト リーチ② 13:45～15:20	幼稚園教諭・ 保育士養成所 アウトリーチ 12:50～16:00
14:00							
15:00	石堤小 会場下見	東五位校下 児童育成クラブ 会場下見					
16:00	南条校下 児童育成クラブ 会場下見	ホール 打ち合わせ	フィードバック 打ち合わせ				
17:00							
18:00	ホール 打ち合わせ					フィードバック 打ち合わせ	全体 フィードバック
19:00							
20:00							
21:00							

担当者の報告・評価

■ この事業への参加動機

当館は1,613席（県西部最大）の客席数を有する大型ホールである。客席規模から、これまで自主事業はオーケストラや吹奏楽のコンサート、オペラなど、「大ホールならではの」内容に偏りがちだった。近年は財団が管理する他施設（カメラ館、万葉歴史館など）を会場にワークショップを行うなど、ホールの「外」を会場とした事業展開を市民クルーとともに企画している。

また、子ども達が豊かな表現活動に親しむことを目的とした事業にも力を入れており、身体表現のワークショップや市内小学校への出前講座事業など、学校の授業にはない「表現すること」の面白さ、楽しさを体験する機会を広げていきたいと考えている。

今後の事業展開を模索する中、これまで自主事業として「演劇」というジャンルに取り組んだことがなかったこともあり、新たなアプローチのヒントを掴みたいと考え参加を決めた。

■ 企画・実施において苦労した点

「演劇」という言葉のイメージ

事業を説明する際に、「演劇の要素を用いたプログラム」とお話すると、「演技指導」や「(演劇の)鑑賞会」と誤解される場面があり、プログラムの内容をイメージしてもらうことに苦労した。相手に伝わる「ことば」を選ぶことの難しさを感じた。

事業の意図を共有すること

アウトリーチ先で、下見の段階では担当の先生にプログラムの内容や事業目的を細かく説明し、こちらの主旨をご理解頂いたと考えていたが、いざ始まってみると肝心な部分が伝わっていなかった、他の先生方と情報が共有されていなかった、ということがあった。事業の目的を関係者間で共有し、理解を深めるためにも、言葉の説明だけでなく、インリーチを行うなど、より具体的な事前の働きかけが必要だったと感じた。

■ プログラムを実施した成果

「子ども」へのアプローチを考えるきっかけに

アーティストが参加者の年齢や個人の性格、あるいは子ども達の関係性をワークの中で巧みに捉え、プログラムの内容を柔軟に変えていたことが特に印象的だった。「子ども」と一括りに考えがちだが、発達段階に応じたアプローチの大切さを考えさせられた。

「アウトリーチ」への理解を広げる

プログラムが終わった後に、必ずアウトリーチ先の関係者とはフィードバックの時間を持つようにした。アンケート等では分からない「生の感想」を聞いたことは貴重な経験であり、また「アウトリーチ」に対する理解を深めてもらう機会にもなったと感じている。

■ 今後の展望

幼稚園や学校の先生を目指す学生、あるいは現役の先生を対象としたワークショップを行って、地域の中に理解者を増やすなど、直接・間接を問わず「子ども」がアーティストとつながる展開を多角的に考えていきたいと思う。

当館は平成30年1月から当面の間休館することが決定した。休館決定後の実施となった3回目の派遣では、拠点となるホールが無い中で継続的に事業を行うにはどうしたらいいか、という事をアーティストや、地域創造の皆さんとたくさんお話をさせて頂いた。このタイミングでリージョナルシアター事業に参加していたことは、本当に大きな意味があったと思う。今回の経験を通して、スタッフ全員が「何を指すのか」というミッションをより強く意識し、事業の展開を考えるきっかけになったと感じている。

プログラム詳細

南条校下児童育成クラブ アウトリーチ

8月17日(木) ①10:00～11:30 対象:19名
②13:30～15:00 対象:19名

市内の児童育成クラブを対象に、「新しい“あそび”を作る」をテーマとしたアウトリーチを実施した。同クラブには様々な学年が集まり、「子ども達で相談して決める」ことが一つのルールになっている。ワークショップが終わった後も子ども達の中でルールを継ぎ足し、進化させていける“あそび”作りを目指した。

前半は「誰もいないスペースを見つけて歩く」「号令と逆の動きをする」など体を動かしてウォーミングアップ。後半はいよいよ“あそび”作り。今回はけん玉を使って、新しいけん玉の「技」を考えたり、グループに分かれてけん玉を積み木に見立てた「けん玉タワー」作り等のワークに取り組んだ。(ワークショップに使うけん玉は、広島県廿日市市の木材利用センターさんにご協力頂いた。) 子ども達は、「けん玉三兄弟」や「ガイコツ」など様々なタワーを作り、ワークショップ終了後、「先生、けん玉ほしい!」と指導員にリクエストする姿が見られた。



東五位児童育成クラブ アウトリーチ

8月18日(金) ①10:00～11:30 対象:27名
②13:30～15:00 対象:28名

対象となる同クラブの児童は、絵本の読み聞かせやミニコンサートなど観賞体験は豊富だが、能動的に「何かをする」という体験が少なかったため、写真を使って自由に設定を想像するアウトリーチを実施することにした。

まずはシアターゲームで体を動かし、互いの緊張をほぐしていった。次に、会場内でアーティストがお題を出した「モノ探し」「色探し」「形探し」「顔に見えるもの探し」などを通して、柔軟にモノを見る練習をした。

後半は写真を用い、想像をふくらませて自由に設定を考えることを体感した。一人一人配られた写真を別の「何か」に見立て、タイトルや設定をクレヨンで書き込んでいった。

使用した写真は会場となった公民館の中にある「モノ」の一部を撮影したものだったが、壁のヒビや机の木目などを宇宙人や動物に見立てるなど、一枚として同じ発想にならなかったことが印象的だった。



小学校4～6年生対象公募ワークショップ

8月19日(土) 10:00～12:00
対象:小学4～6年生/9名

高岡市が取り組む「大伴家持生誕1300年記念事業」の一環として、一般公募による子ども達を対象に、市民会館のステージ上を会場としたワークショップを実施した。

まずは椅子取りゲームや名前鬼などの遊びを通して互いにコミュニケーションをとり、初対面同士の緊張をほぐしていった。次に複数の「だまし絵」や写真を用いて柔軟にモノを見ることを体感し、想像をふくらませて様々な設定を考えていった。

後半は一人一枚写真を配布、それを別の「何か」に見立て、タイトルや設定を描き込んだ。使用する写真は、万葉歌人・大伴家持ゆかりの市内風景を撮影したものを用意。参加者は思い思いに描き込み、互いの作品を発表しあった。子ども達の自由な発想に、ワークショップを見学していた大人達からは驚きの声が上がっていた。最後に、写真が全て市内を撮影したものだと聞いた参加者からは「行ってみたい!」という声があがっていた。

また、ワークショップの「おまけ」として緞帳が徐々に上がっていく様子をステージ上で体験。参加者は客席に向かって思い切り叫ぶなど、舞台上立つ感覚を味わった。



高岡市立石堤小学校アウトリーチ

2月1日(木)①10:45~12:00 対象:1~3年生/24名
②13:45~15:20 対象:4~6年生/28名

市内で最も児童数の少ない小学校で全校児童を対象にアウトリーチを実施した。アーティストによる「ういろう売り」の口上の後、「誰もいないスペースを見つけて歩く」「人とぶつからないように歩く」など体を動かしてウォーミングアップ。その後、8月に実施した児童育成クラブと同じプログラムを実施。自由に発想することが苦手で固まってしまう子どももいたが、周囲の児童がフォローし合って作品を仕上げていた。最後に、ワークで使った写真が校内を撮影したものと種明かし、実際の撮影場所を探しに行った。子ども達はまるで宝探しをしているようで、見つけると興奮した様子で互いに教え合っていた。



高岡第一学園幼稚園教諭・保育士養成所 アウトリーチ

2月2日(金) 12:50~16:00 対象:2年生/36名

幼稚園教諭・保育士を目指す学生を対象にお芝居のエチュードを創るアウトリーチを実施。会場となる養成所は敷地内に幼稚園を併設しており、参加生徒には事前に、“園内(実習先の幼稚園を含む)の好きな場所”“大切なモノ、コト、ヒト”というテーマで写真を撮影・提出して貰った。前半は簡単に体を動かした後、教室内の「色探し」「形探し」「顔に見えるもの探し」などを行った。続いて、自身が撮影した写真を別の「何か」に見立て、よりイメージしやすいようにクレヨンで描き込みをして貰い、全体で発表・共有した。

後半は7つのグループに分かれ、描き込みしたお互いの写真を構成して一つのストーリーを創作し、それをお芝居に起こしていった。普段幼稚園で使っているおもちゃやお遊戯会で使った被り物等を小道具に活用する、スマートフォンからダウンロードした効果音を鳴らす、新聞紙で作った紙鉄砲で花火の音を表現するなど、演出には幼稚園の先生を目指す学生ならではの柔軟な発想、工夫が見られ、各チーム個性豊かな物語を創り出していた。

最後は作ったお芝居を互いに発表。思いがけないストー

リー展開や小道具の使い方、クラスメートの意外な一面を発見し、驚きの声と、笑い声が絶えない発表となった。



フィードバック報告

〈参加者〉

担当者、館長、事業担当職員、管理担当職員、アーティスト、アドバイザー、地域創造

〈論点〉

- ・自分の外側に世界をつくることのできるアーティストの役割
- ・市民と質の高い外部人材をつなぐことのできる公共ホールの役割
- ・当該の職員との意見交換
- ・市や外部団体との関係構築に関する事例紹介
- ・ホールの休館が決定したことを受けて、視点を市内に移すことの必要性と、財団管理施設との協働の可能性

客観性をもって演劇的に街を遊ぶ

能登半島の右側のつけ根、富山湾に面した場所に富山県高岡市はあり、近隣の金沢とも富山とも違い古き良き城下町の風情が残っていました。また高岡大仏、瑞龍寺、雨晴海岸など地域資源の多い県内第2の都市高岡。藤子・F・不二雄の出身地でもある高岡市は現在人口17万人。

想いを具体的なプログラムに

リージョナルシアターではまず担当になった方とヒアリングの様な形から始まります。

街の特性や特色、産業や観光資源、ホールが目指している方向性や応募動機。

高岡市は初めて演劇プログラムを行う事もあり割と丁寧に、時には雑談からヒントを探しながら今回のプログラムに辿り着きました。

印象的だったのは「この街の子ども達が大人になっても劇場や公共施設に懐かしさを持って帰って来れる場所にしたい」という担当者からの言葉でした。ホールの代表として研修会に参加し、それを持ち帰り職員に共有して行く作業は初めてだと尚のこと普段の職務と違い、不安を感じるものだったのかもしれない。

鑑賞事業をメインにしている劇場などは、演劇の可能性、多様性を知るところからのスタートだったりします。今回を通して少しでもその事に職員の方が気付いてくれる様最大限の配慮もしながら、他所者だからこそ気付ける客観性で街を歩き実施しました。

10年後20年後の街を支える人々に

今回子どもや学生対象のプログラムでしたが、これもこれからの高岡を背負う子ども達にできる種まきだからだと感じてます。アウトリーチでは学校では普段出会うことのない芸術体験を。演劇を好きになってもらうのではなく、演劇の持っている力のひとつ想像力を使い一人一人が個性を持って想像を遊べるのか。

ワークショップでは本人が希望して参加しているのももう少し具体的に。大伴家持が高岡の風景で和歌を詠んだ様に、その風景の写真からあなたならどう想像して別の空想へ飛べるのかを。大切な事は種まきは継続が大切という事、そして芽が出るのは10年20年後だという事。だからこそ長期的なビジョンがはっきりしている劇場や施設は目的が定まりやすい気がしています。場所が無くても出向けばいい、市民はずっとここで暮らしています。

高岡モデルを作って欲しい

全国的に少子高齢化、人口減少は起こっています。高岡も例外ではありません。改めて思うとき高岡は食べ物、空気、四季のはっきり分かる景観、鋳物職人の街として反映したモノ作り精神、観光資源含め魅力が沢山です。その財産を生かすも殺すもそこに住む人がどうあるべきかと感じています。芸術の持つ力が住む人々の心も体も豊かにして行くと信じています。そこを繋ぐきっかけ作りを職員の方々が知恵を絞り楽しみながら挑戦して行ってもらいたい。そうすれば必ず「この街の子ども達が大人になっても劇場や公共施設に懐かしさを持って帰って来れる場所」になると思います。

CASE 7 袋井市メロープラザ(静岡県袋井市)

実施データ

実施団体	袋井市総務部市民サービス課
実施ホール	袋井市メロープラザ
担当者	永井義博
派遣期間	1回目派遣 平成29年7月17日(月)～7月18日(火) 2回目派遣 平成29年10月19日(木)～10月22日(日) 3回目派遣 平成29年10月26日(木)～10月29日(日)
アーティスト等	アーティスト:田上 豊 アシスタント:長野 海、大池容子
1回目派遣内容:	7月17日 ワークショップ会場下見(メロープラザ)、企画内容打ち合わせ 7月18日 ワークショップ会場下見(どまんなかセンター)、企画内容打ち合わせ
2回目派遣内容:	10月19日 16:30～18:30 袋井高等学校演劇部の西部大会用作品の総見とアドバイス 10月20日 19:00～21:30 しのがや座、演劇集団 es、一般参加者による演劇ワークショップ(参加者:15名) 10月21日 15:00～17:00 演劇集団 es、一般参加者と演出家・俳優によるミーティング(参加者:5名) 10月22日 台風20号接近のため中止
3回目派遣内容:	10月26日 18:00～20:00 劇団青年団・長野海による日常を演じるワークショップ(参加者:20名) 10月27日 18:00～20:00 うさぎストライブ・大池容子による嘘を旅するワークショップ(参加者:20名) 10月28日 15:00～17:00 劇団田上バル・田上豊によるどまんで演劇をしよう(参加者:20名) 10月29日 10:00～12:00 フィードバック

スケジュール

	1回目派遣		2回目派遣				3回目派遣				
	7/17	7/18	10/19	10/20	10/21	10/22	10/26	10/27	10/28	10/29	
9:00						台風20号 接近のため 中止					
10:00		参加団体との 打ち合わせ									
11:00											フィード バック
12:00											
13:00		参加団体との 打ち合わせ									
14:00	参加団体との 打ち合わせ	市内視察									
15:00		参加団体との 打ち合わせ									
16:00					一般市民 のWS 15:00～ 17:00					一般市民・ 高校生のWS 15:00～ 17:00	
17:00	市内視察		袋井高校 演劇部視察 16:30～ 18:30								
18:00											
19:00								一般市民・ 高校生のWS 18:00～ 20:00	一般市民・ 高校生のWS 18:00～ 20:00		
20:00	参加団体との 打ち合わせ			一般市民 のWS 19:00～ 21:30							
21:00											

担当者の報告・評価

■ この事業への参加動機

袋井市メロープラザは開館7周年を迎え、さらに多くの市民に愛される施設を目指して運営されています。しかし、本館は当初から「集会所」の範疇で設計・建設・運営がされており、多機能ホール（500席）も団体の総会、講演会、芸能大会等が主な利用となっています。会議室等の利用も会議、講座、料理教室、ダンス練習、楽器練習等で、最初から文化施設としての基本設計がなかったと言えます。しかし、平成27年の俳優・西村雅彦の舞台や、平成28年の静岡の劇団SPACの舞台がメロープラザで上演されたことをきっかけに地元でも演劇への関心が少しずつ盛り上がってきました。

■ 企画・実施において苦労した点

本リージョナルシアター事業の実施にあたり、メロープラザとしての最初の取り掛かりが遅かったことが苦労した原因でした。一般的に、自治体はどうしても年度をまたいでの事業が苦手です。そのため、参加者の募集についても学校現場の状況を理解していれば、本来は前年の12月に小・中学校に募集を掛ける必要があったのですが、4月になっても何のアプローチもできていませんでした。5月になってあわてて募集をかけてもすでに遅く、年間計画のできている小中学校からはどこからも応募がありませんでした。

■ プログラムを実施した成果

今回、参加団体を募集するにあたり、演劇に関心の少ない袋井市では「広報誌」での募集では応募は心もとないと考え市民への口コミで募集をかけました。その結果、最初に演劇愛好家の方の数人と接触することができ、さらに地域の劇団や演劇愛好家のグループ3団体ともつながりを持つことができました。その中の1つである「しのがや座」は、袋井市の名刹・岩松寺の檀家のみなさんを中心にした団体です。この団体は、地域でイベントを開催するにあたり、にぎわい作りと地域住民の強い結びつきを確保するため、地元で伝わる昔話をモチーフにして村芝居を作りました。普段は会社員、農業、工場勤務の人が、それぞれの特技を生かして脚本を作り、役者、大道具、小道具、音響、照明と手作りの舞台を作り上げ、多くの観客を楽しませました。2つ目の「演劇集団es」は、袋井・掛川地区で活動する市民劇団です。この劇団は定期的に練習・公演を開催しており、東日本大震災のチャリティー公演や、地域のイベントで演劇のワークショップを開催して演劇の普及に努めています。活動場所は美感ホール（掛川市）、月見の里学遊館（袋井市）、そしてここメロープラザとなります。そして3つ目が、今まで部員の減少に悩んでいた袋井高等学校演劇部です。幸い、ここ数年は多くの新入生が入部して勢いを取り戻しつつありました。メロープラザは、今回のリージョナルシアター事業のお蔭で、これらの3つの団体と交流が持つことができました。

■ 今後の展望

今回のリージョナルシアター事業をきっかけに、平成30年度のメロープラザの提案事業に「演劇集団es」が応募してくれました。メロープラザで演劇の公演や、イベントでのワークショップを開催していただく予定です。さらに、同じく今回参加してくれた袋井高等学校演劇部の定期公演などもメロープラザで誘致して、高校演劇を支援する方法も検討していきたいと考えています。また、これらの公演の原作と

して、しのがや座が作成した地元の昔話を脚色した台本で上演してもらえればさらに楽しいかと思われま
す。ちょうど、今年が明治維新150年でもあり、美しい村娘を2人の武士が争って果し合いをした脚本が
活かせる年かもしれません。もう1つ、入学式・卒業式でメロプラザをよく利用していただく外国人留
学生の学校である静岡国際言語学院（市内浅名）の授業のカリキュラムにも演劇を活かした勉強ができる
かを検討していけたらと考えています。一方、商業演劇については、月見の里学遊館で生涯学習課の所管
する芸術文化活動の一環としてすでに手掛けていますので、これらと内容が重ならないように調整してい
きたいと考えています。

プログラム詳細



演劇のワークショップ

10月21日(土)19:00~21:30

「しのがや座、演劇集団es、一般参加者による演劇のワークショップ」と題してメロープラザの会議室にて開催した。参加者は、小学生・中学生から大人まで、さまざまな年代の男女が参加し活発に行われた。最初に田上豊氏からのオリエンテーションがあり、本日の目的や進行についての説明があった。本日は、特に演劇に関心の高いみなさんが参加しており積極的に取り組む姿が見られた。メニューは、演劇の基礎から学ぶということであったが、途中からは会議室を飛び出して、廊下やロビーなどのいろいろなシチュエーションの元で実施していった。右の写真は、最初のオリエンテーションのもので参加者の後姿には緊張感が残っているのが感じられる。アーティスト、アシスタントの意気込みが感じられた。

嘘を旅するワークショップ

10月26日(木)18:00~20:00

10月27日(金)18:00~20:00



「うさぎストライプ・大池容子による嘘を旅するワークショップ」と題してWSを開催した。袋井高等学校演劇部の参加も2日目となり、演劇集団esや、しのがや座との連携もスムーズになってきた。本日のメニューは、「日常から少しズレること、現実にはありえないこと。」を劇として成立させ

るためにカリキュラムが組まれているようである。アーティストの用意してくれた導入部分も、台本が用意されてからの部分の動きも、自分のような初心者にはついていくのがやっとであった。しかし、ていねいに指導していただき、特に高校生は吸収するものが多かったと思う。右の写真は、メロープラザでの最後のWSということで参加者全員で記念写真を撮影した。アーティスト、アシスタント、スタッフ、そして参加者とも充実したWSに満足していた。

どませんで演劇をしよう

10月28日(土)15:00~17:00

「劇団田上パル・田上豊によるどませんで演劇をしよう」と題して「どまんなかセンター」を会場にして開催した。本日の会場・どまんなかセンターは、戦後すぐの昭和25年に建設された元洋裁学校の建物で、国登録文化財となっている。そのため、日常のいろいろな場面を想定してWSを行うのには、大きな効果が発揮できる素材である。本日は、袋井高等学校演劇部の1年生と市民3名の参加者を中心としたWSである。台本を使った各グループの取り組みも、たいへん熱心であり高校生・一般市民が融合している姿が、袋井市にもこれほど演劇に関心の高い人々がいたのかと驚かされた。写真は、最終日のWSの1コマで高校生グループの取り組み状況である。広間、和室、小部屋、階段のクラシカルな内装がストーリーに深みを与えている



フィードバック報告

〈参加者〉

館長、市役所担当課長、アーティスト、アシスタント、地域創造

〈論点〉

- ・アーティスト、アシスタントからの今回の事業の振り返りコメント。
- ・地域創造の調査研究「文化的コモンズ」(芸術文化を媒介とした地域共同体)の概念の紹介。
- ・「文化的コモンズ」の概念を、今後の事業展開のイメージと重ねて検討。

地域をコーディネートする必要性

引き継ぎの重要性

地域創造のリージョナルシアター事業で静岡県を担当したのは三年目でした。個人的には、これを静岡三部作と呼ばせて頂きたいと思います。一年目は、県庁所在地にある静岡市民文化会館、二年目は、山間部に位置する川根本町文化会館。そして、三年目が袋井市にあるメロープラザでした。三年連続で静岡県を担当しましたので、相当静岡に詳しくなりましたと思います。一つ言えるのは、どこの地域のお茶も抜群に美味しかった、ということでしょうか。

さて、袋井市のメロープラザです。地域創造のリージョナルシアター事業では、実施の前年度にエントリーしていただき一年かけて下準備をするのですが、実施する年度に変わった途端、劇場の担当者が変更になるケースがあります。これは仕方の無いことではありますが、一番困るのが、変わった担当者にほとんど引き継ぎが行われていない場合です。メロープラザは、まさにこのパターンでした。入りの段階から「エントリーシートが前任者の記載したもので何と分からない」と言われてしまうと、正直な意見とはいえこちらもお手上げになってしまいます。せめて、きちんと引き継ぎくらいは行って頂けると助かります。

出会いから継続へ

メロープラザでは、袋井におけるアート活動の経験者（本格的な舞台出演やアートでの地域おこし活動を含む）と地域コミュニティで表現に興味がある非経験者（上記の人達と分けるために非経験者と記す）が混在するワークショップを展開しました。こういう形のもは、「出会い（コミュニティ形成の芽）」として功を奏することがありますが、あくまで出会いの機会としての機能しかないので、その後の継続性（なにかしらの活動）を視野に入れていないと、概ね単発の事業として終結します。これはとて

も残念なことです。自主事業のあまりない貸し館が主な劇場であっても、地域における多様な経歴を持つ表現者を集めてみることに成功したのですから、その先を見つめてほしいと願っています。例えば、混成メンバーの中には袋井高校の演劇部メンバーがいましたが、アウトリーチ内での活動とはいえせつかく劇場とコミットできたのですから、それっきりで終わらざるは、地域の若い層に対する劇場の態度としても一考の余地有りかもしれません。

袋井高校演劇部の視察は、高校生と表現を生業とする大人との出会いの場になりました。また、ちょうど学内で創作期間中だったようで、実際に演劇部の教室で通し稽古を見せて頂き、その上でアドバイスを行えたことは、彼ら彼女らにとって刺激的な時間だったのではないかと思います。アシスタントの中には高校演劇の審査員を行う者もいたので、尚更だったのではないのでしょうか。ワークショップ以外の時間にこういった体験を出来たのは、とても新しいことでした。こういうのもやはり有意義ですね。

ホールの役割を考える

メロープラザでの実施で一番痛感したことは、赴任地に対して我々のような新参者が出向く時、地域のことに対して（今回で言えば主にアート）詳しいコーディネーターがいないと大変難儀するということでした。面と向かって「場所は提供するので後は好きにどうぞ」と言われてしまったことは残念極まりないことであり、地域のホールと連携を図って事業を展開できないのはモチベーションに関わりません。事業に対して無知である以上、また担当者的変更という事態を加味しつつも、歩み寄りの姿勢がなければ苦痛を伴います。今回の実施を糧に、前向きに劇場としての機能を再考していただき、市民のためにアートで還元出来る方法を探して頂ければ幸いです。敢えて、応援メッセージとしてここに記しておきたいと思います。

picup photos



CASE **8** 舞鶴市総合文化会館(京都府舞鶴市)

実施データ

実施団体	公益財団法人 舞鶴市文化事業団
実施ホール	舞鶴市総合文化会館
担当者	椿 幸恵
派遣期間	1回目派遣 平成29年11月13日(月)～11月14日(火) 2回目派遣 平成30年2月1日(木)～2月4日(日) 3回目派遣 平成30年2月7日(水)～2月10日(土)
アーティスト等	アーティスト:ごまのはえ アシスタント:高原綾子、小山裕暉
1回目派遣内容:	11月13日 ワークショップ会場下見、企画内容の打合せ 11月14日 企画内容の打合せ、市内視察
2回目派遣内容:	2月1日 13:25～15:15 高校ワークショップ①(2年5組/参加者:40人) 18:30～21:00 一般対象ワークショップ①(参加者:15人) 2月2日 9:50～11:40 高校ワークショップ②(2年2組/参加者:39人) 13:25～15:15 高校ワークショップ③(2年4組/参加者:37人) 2月4日 14:00～16:00 一般対象ワークショップ②(参加者:15人)
3回目派遣内容:	2月8日 9:50～11:40 高校ワークショップ④(2年3組/参加者:40人) 13:25～15:15 高校ワークショップ⑤(2年1組/参加者:37人) 2月9日 18:30～20:00 一般対象ワークショップ③(参加者:14人) 2月10日 10:00～12:00 フィードバック ※一般対象ワークショップは3回連続参加のプログラム

スケジュール

	1回目派遣		2回目派遣			3回目派遣			
	11/13	11/14	2/1	2/2	2/4	2/8	2/9	2/10	
9:00		市内視察							
10:00				高校WS② 9:50～11:40		高校WS④ 9:50～11:40		フィードバック	
11:00									
12:00									
13:00									
14:00	会場下見・ 打合せ			高校WS① 13:25～15:15	高校WS③ 13:25～15:15	一般対象 WS② 14:00～16:00	高校WS⑤ 13:25～15:15		
15:00									
16:00									
17:00									
18:00									
19:00								一般対象 WS③ 18:30～20:00	
20:00				一般対象 WS① 18:30～21:00					
21:00									

担当者の報告・評価

■ この事業への参加動機

舞鶴市文化事業団では、地域文化の創造育成、文化芸術の新たな担い手となる次世代の人材育成を目的に、ワークショップ、アウトリーチ等を用いた創造育成事業を多く取入れた事業を実施しています。演劇関連では身近に演劇に触れる機会が少ないため、今回のような事業を継続的に実施したい、今後の演劇関連事業の振興に取り組みたいなど、本事業に参加し体験する事により、子どもから一般までの市民が、様々な表現、新たな価値観を創造し、演劇や文化芸術に関心を持ってもらうきっかけとなればと思い参加しました。

■ 企画・実施において苦労した点

当初、本事業の趣旨を十分に理解しておらず、最初の企画内容を決める段階で行き詰ってしまいました。アドバイザーの方から一般ワークショップは「舞鶴の地域性を生かし、写真を使ったワークショップが良いのでは」とアドバイスをいただいたが、実際にどのようなワークショップなのか、どう進めていけば良いのか全く分からず、とても悩みました。ごまのはえさんから、他のホールで「地域と創る舞台」として地元の昔の写真から演劇を創る事業を3年計画で実施されている事を聞き、3年目の公演を実際に見る事ができました。その舞台を観て「写真から舞鶴の物語を創るワークショップ」を実施したいという思いに変わり、プログラムの内容は決まりました。今度はそれを市民に対して、どう伝えるか、言葉での説明も難しかったし、募集案内をどう表現するかなど、伝える事の難しさを痛感しました。

高校ワークショップでも、一般ワークショップと同じ「写真から台本を創るプログラム」を実施する事となり、家で写真を探すところからワークショップが始まる事をイメージし、事前に生徒から昔の写真を集める事にしました。写真を持って来る際の条件やプログラムの内容等、先生から生徒へ伝えていただく事にも苦労されていたため、会館から担当の先生へ見本の写真を渡すなど、もう少し分かりやすく説明する必要があったと思いました。

■ プログラムを実施した成果

高校生対象のワークショップは、会館として初めての実施という事もあり、生徒たちがどんな反応を示すか、真面目に台本を書いてくれるだろうかなど不安もありましたが、一枚の写真から想像（創造）力を働かせ、グループで一つの台本を創るとい、演劇を創る側の体験をする事により、普段見ている映画やテレビドラマの見方が変わったなど、新たな発見や創る楽しさを知ってもらう事が出来ました。生徒達は初めての体験で、最初は不安や緊張があったようだが、「自分達でストーリーを考えるのは難しかったけど、班で話をして行くうちに一枚の写真から様々な状況が思い浮かんで来てとても楽しかった」「台本の書き方を知る事により、セリフの他に『ト書き』をつけてイメージを湧きやすくする事など、文化祭のクラス演劇に役立てたい」など貴重な体験が出来たと、多くの感想を聞く事が出来ました。

また高校2年生という自分の将来を考える時期でもあり、脚本家や演出家、俳優という職業について考えるなど、生徒一人一人が様々な視点によりワークショップを体験する事で、多くの成果や新たな可能性がある事を実感しました。

ワークショップで必要な舞鶴で撮影した昔の写真を集めるために、市役所の方や知人を通じて、地域の

商店街や地域の歴史を研究されている方などを紹介していただき、昔の祭りや伝統行事などの沢山の写真が集まり、そうした新たな出会いから舞鶴の昔の生活や歴史など様々な情報に触れ、経験を持つ人たちの話を聞く事で、人との繋がりが文化芸術につながる事を実感しました。

■ 今後の展望

高校ワークショップは、今回の事業をきっかけに今後も継続し、文化祭でのクラス演劇で少しでもオリジナルの作品創りが出来る事を期待します。

また会館の自主事業として、ごまのはえさんからの事業提案により、3年間の計画で舞鶴の昔の写真とエピソードを素材とし、舞鶴の物語を創作していただき、プロの劇団の方や今回の一般ワークショップの参加者と共に、一つの演劇作品を創り上げる「まいづる物語プロジェクト」の実施が決まりました。地域の方とこのような事業の実施は会館としても初めてですが、新たな目標が出来た事で、楽しみでもあり、また地元の演劇者のレベルアップや地域の舞台芸術の振興に繋がるのではないかと考えています。

今回の事業で、地域の行事として商店街や地域の祭りを楽しみ、賑わっている昔の写真を見ていると、時代の流れとともに人口減少、高齢化、ネット社会の進展等により、地域コミュニティ活動が衰退している状況を強く感じました。今後は文化芸術を地域の若い世代に伝える事で、地域の活性化に繋がるような事業を、多く取入れていきたいと考えています。

プログラム詳細

東舞鶴高等学校2年生対象ワークショップ

2月1日(木)13:25～15:15

2月2日(金)9:50～11:40、13:25～15:15

2月8日(木)9:50～11:40、13:25～15:15

東舞鶴高校では、3年生は文化祭でクラス演劇の発表があり、その参考になればという事と一般ワークショップと関連性のあるプログラムとし、写真から着想を得て短いセリフ劇の台本創りに挑戦してもらいました。生徒からは古い写真を家から持って来てもらいました。

初めに、ごまのはえさんに60年前の東舞鶴高校での写真から台本を事前に創っていただき、スクリーンに映した写真の前で俳優さんに演じていただきました。その台本を一人一人に配り、ト書きや台詞の書き方の説明があり、次にテーブルの上に、生徒からの写真と会館で用意した舞鶴で撮影された古い写真が広げられ、その中から1枚好きな写真を選びました。台本を書くために、まず写真をよく見る事の大切さなどの説明があり、写っている人物や人物同士の関係や状況、場所、季節や時代背景などを想像します。「着ている洋服から季節は冬!」「同じクラスの一人が転校して行く前日で撮影しているのはお母さん!」など、グループで楽しそうに想像(創造)力を働かせます。次に想像した状況から登場人物の会話を考え、出来上がったグループから発表しました。

短い時間の中で「男子高校生の熱い友情を描いたもの」や「ショウウインドウの花嫁衣裳のマネキンと子供のマネキンを見ている女性二人の写真」からは見ている女性の会話だけではなく、見られているマネキン同士の会話を入れるなど、グループの個性あふれる作品が完成しました。

ごまのはえさんから生徒たちに、「このワークショップで台本を書く経験をしたことに自信を持って下さい」と言われました。このワークショップでの体験により創作意欲が湧き、文化祭のクラス演劇が生徒によるオリジナル作品になることを期待します。



一般対象ワークショップ

2月1日(木)18:30～21:00

2月4日(日)14:00～16:00

2月9日(金)18:30～20:00

タイトルは「ごまのはえさんと演劇をつくろう!～写真・エピソードから舞鶴の昔を再現!～」として一般募集し、参加者は地元の演劇サークルの方をはじめ、演劇や写真に興味がある10代から70代までの幅広い年代の、個性豊かな方たちが集まりました。

1日目は「楽器を使ったワークショップ」です。世界の珍しい民族楽器を使って、グループごとに演劇の台本に合わせて効果音を創りました。言葉ではなく音でも表現出来る事に新鮮さを感じ、とても楽しかったと言っていました。

2日目と3日目は、舞鶴で撮影された昔の写真の基に想像を膨らませ台本創りに挑戦しました。出来上がった台本の発表では、参加者にも読み手になってもらいました。どの作品も初めてとは思えない、想像(創造)力豊かな面白い作品でした。

参加者からは台本を書く事の楽しさや、様々な物語の可能性のある事が大変面白かったとの感想をいただきました。



フィードバック報告

〈参加者〉担当者、アーティスト、アシスタント、アドバイザー、地域創造

〈論点〉

- ・三か年計画の市民参加演劇事業に向けての課題整理。
- ・助成金獲得の検討。
- ・高校アウトリーチの継続について。

地元の人たちとゆっくり進める

三か年計画の一年目

2017年度のリージョナルシアター事業で私は京都府舞鶴市に派遣されました。実施が2018年2月でしたので、ほぼ1年をかけて話し合うことができました。その過程でリージョナルの枠を越えて、3年がかりで企画を実施することになりました。

その企画とは3年かけて地元（舞鶴）の方から、舞鶴で撮影された写真を募集し、また写真にまつわるエピソードを提供者からお聞きし、そこから着想を得て、私と舞鶴の表現者が共同で演劇作品を創作するというものです。その最初の年として2017年度のリージョナルシアターを使わせてもらいました。

この企画（以下、「舞鶴物語プロジェクト」と記します）は、公共ホールが「写真」と「演劇」という二つの表現メディアを通じて、地域の歴史やそこで暮らす人々の生活史をさぐってゆく企画です。1年目は写真の募集と写真にまつわるエピソードの採取。2年目は前年の成果を幾つかの短編作品にして、それを市内の市役所や商店街など公共性の高いスペースでの上演。3年目はこれまでの成果をもとに長編作品を創作し劇場で公演。劇作家である私は、過去に深く根ざしながら、未来を見つめる作品をつくりたいと願う一方、主催者である公共ホールにとってこの企画の意義は、その創作過程にあると思います。

2017年度を振り返りながら、私が思う公共ホールにとっての企画意義を説明します。

本年の目標は協力者と出会うことでした。今回の派遣のメニューを並べると、

- ① 写真を募集し、その写真から台本を作成するワークショップを開催（一般対象・高校生対象）
- ② 舞鶴市内を拠点に活動する表現者を訪問
- ③ 舞鶴の歴史に詳しい方から話を聞き、舞鶴各所を訪問。

①～③どれもが、「舞鶴物語プロジェクト」に内包されたものであり、また「舞鶴物語プロジェクト」の協力者を募るものでした。

交流の場としての公共ホール

これらを通じて、私は舞鶴には自分たちの街をもっと面白くしたいと思い行動している人が沢山いることを知りました。また舞鶴をより面白くする魅力の原石とも言うべき知識をお持ちの方とも出会いました。さらにご自身の人生を舞鶴の街の歴史と重ねて語れる方とも数多く出会いました。この方々が「舞鶴物語プロジェクト」を通じて交流を重ねること、その交流の場として公共ホールがあること、それが私の考える公共ホールにとっての本企画の意義です。

私は「地元根ざした」公共ホールが好きです。地元の表現者のもとより、地元を知っている人、地元に面白くしたい人、なんかしたい人、ただ暇な人、そういった人たちに交流の場を設け、活動を活性化させてくれるような公共ホールが好きです。この「舞鶴物語プロジェクト」は、（すでに1年目がそうであったように）その進行過程において沢山の協力者を必要とします。写真を募集すること。写真にまつわるエピソードを採取すること。そこから台本をつくること、など。一つ一つの工程において表現者は、地元の協力を求めなくてははいけませんし、主催者はその場を設けなくてははいけません。そういった経験の蓄積がそのまま「地元根ざした公共ホール」への道につながっていると私は思います。

また3年という長い期間をかけて実施するのは、この企画のことをゆっくり幅広く知ってもらうためです。単年度では、地元の方に周知されないまま事業が終わってしまう恐れがありました。この企画について興味を持ってくれた人を一人でも多く巻き込みながら、面白い作品ができればと思っています。

picup photos



平成29年度リージョナルシアター事業報告書

発行・編集

一般財団法人地域創造

デザイン

村田 亘

発行日

平成30年3月30日

